



091478-000-2

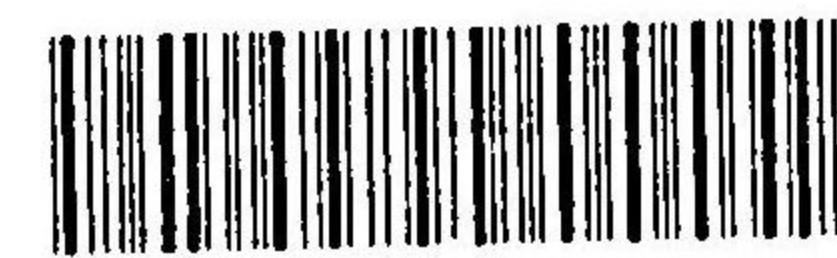
特43-99

名鎗笹野実記 (今古実録)

栄泉堂

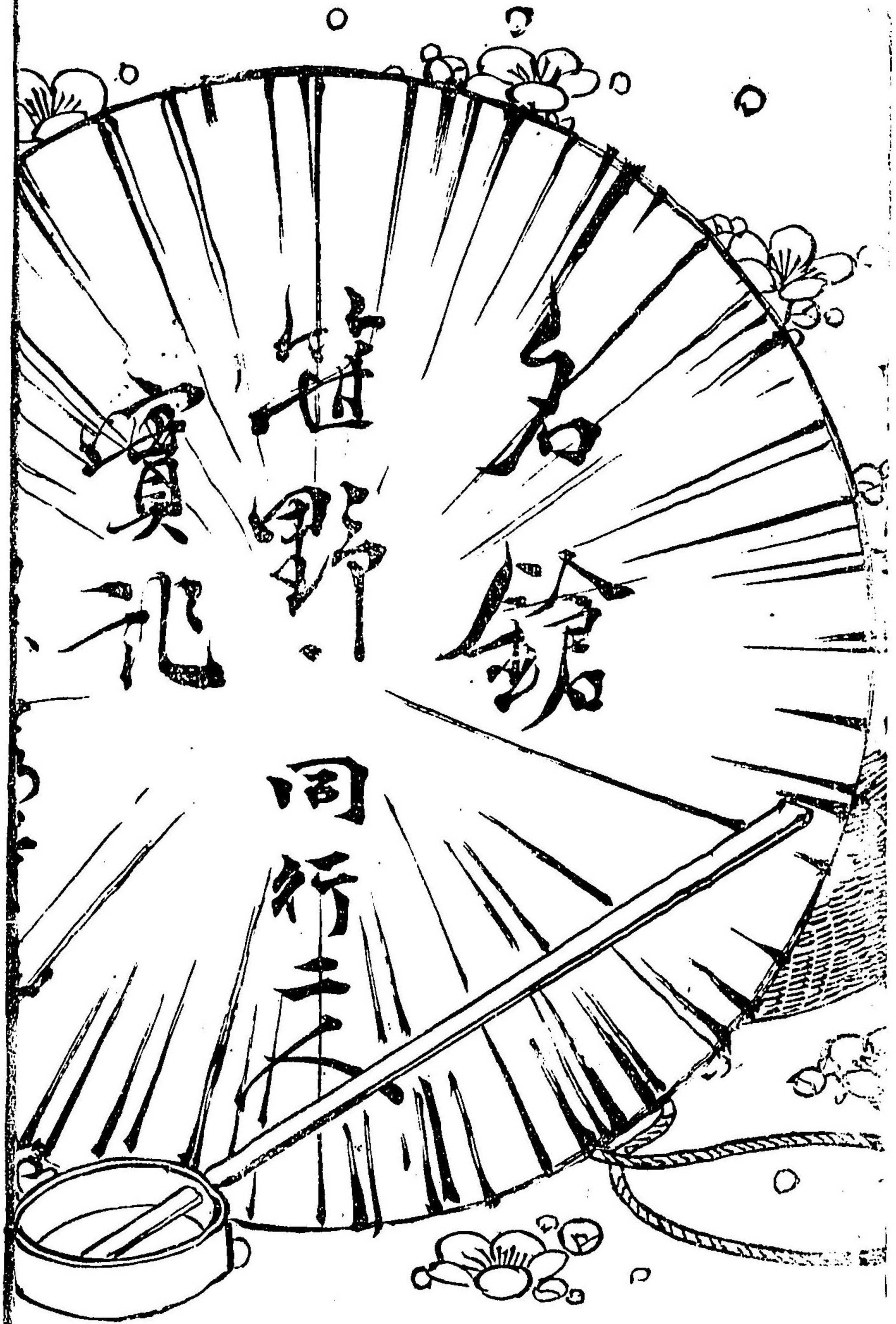
M19

DBN-2447





99
鎗野上実記



今古 名鎗笹野権三郎實記序 明治十九年五月十一日 内務省勸業

復讐の舉古より鮮しとせむ然れ共編者多くの無根の説を附會して徒母
 其文を粧ふが故ふ却て其真を失ふもの往々而有焉嗚呼可嘆の至りあるを
 や故人云精神一到何事不成と今の昔一寛永の其頃より久しく人口に膾炙
 する笹野同胞が多年艱難を忍び窮厄を耐へ終ふ誠心貫徹して公儀の裁許
 を蒙り不俱戴天の大義を遂げ一頭末をものゝるふ臨み勉めて虚を去り賢
 ふ就き短を除きて長状取り一冊完備の便利よく讀者諸彦の高評を仰がん
 と獨自慢の天狗母て拙き筆を捻りつ、茲よ一語状吐露して聊序辭を換ゆ
 ると云爾

明治十九年五月

榮泉堂主人誌



名鑑 笠野實記 目錄

○將軍家大久保彦左衛門殿諫言の事しやうぐんけへおほくべひこさぶろ せんざのかんげん并高田又兵衛鎗術精妙の事たかたまたべ ぶさうじやうせいめう

○笠野權三郎義胤生立の事さのの こん よしたねをりたち 并武術丹練の事ぶじゆつたんれん

○笠野權三郎種田五郎左衛門議論事さのの こん たねたご ぶんざえもんぎ ろんの并權三郎紀野川堤にて危難の事ごん さのの けのの かわづか

○義胤紀州和歌山を立退事よしたねきしゅうわかやま たちのり 并備前岡山へ行事びぜんをかやま いく

○犬上三四郎佐原重兵衛を毒殺の事いぬがみ さほらぢやうぢやうぢやう ぶくさつ并權三郎佐原の死去と聞岡山へ歸事ごん さほら しくた きこふかやま かへる

○權三郎佐原の讐を報むる事ごん さほら あだをほうむる 并權三郎乙丸の後見と成る事ごん さほら 乙丸のこうけん なる

○義胤岡山を立退く事よしたねをかやま たちのり 并山道小路迷ふ事やまみち せうじ さまよふ

○權三郎拂々と仕留る事ごん ひりやうと しとめる 并佐布里左内へ逢ふ事さふりさない であふ

○義胤播州上月ふ到る事よしたねばんしうかうづき いた 并仲間奉公状をる事ちゆうげんほうこうじやう

○長谷川兄弟不覺の事はせがわ けはせやうぢやうぢやう かく 并新八郎若黨愛助と計る事しんぱちやう わかたうぢやうぢやう いく

○權平長谷川兄弟を討事ごんぺい はせがわ けはせやうぢやうぢやう うち 并佐布里左内歸參の事さふりさない かいさん

○權三郎上月を立退く事ごん かうづき たちのり 并妹お梅お巡り逢ふ事いもお ume おめぐり であふ

○お梅國元の變事を語る事おめくにもと へんじ かつ 并兄弟報讐首途の事ちゆうけい けはせ うちうぢやうぢやう

○笠野權三郎倉澤ふて危難の事さのの こん くらさわ ぶて けん 并三島よて町人を助る事みしま よて ちやうじん たす

○義胤江戸表へ来る事よしたねに じやう へき くる 并紀州家の上屋形へ到る事きしゅうけ かのや かに いた

○權三郎敵の在家を聞く事ごん かのたか ありか き 并敵種田を取返す事かのたかたね とりかへ

○義胤再度大坂へ赴く事よしたねさいご しばさか ぞく 并播磨灘にて海賊退治の事はりま 灘 かいぞくたいぢ

○室津よて笹野同胞再會の事

并同胞九州渡海高田又兵衛對面の事

○權三郎種田が奸計に陥る事

并高田宮本義胤を救ふ事

○權三郎敵種田を討事

并笹野家再興の事

名倉笹野實記目錄終

名倉笹野權三郎實記

○將軍家又保彦左衛門諫言の事

并高田又兵衛鎗術精妙の事

○笹野權三郎義胤生立の事

并武術丹練の事

○伊弉諾伊弉册尊天の浮橋に立給ひ天の瓊矛を以て探り一
の蒼龍原を得給ひまると日凝島と名号給へり然らば諸の武器多きが中に矛

始て其用をおせり俗に鎗は往古おたなると云へど是矛の往古あると知ざ
るあり矛の即ち鎗にて其用敵を突を利とす但其鎗術ふ精を究めたるは
近き昔の事あれど是を使ひ始めの楠正成の家人天野了眼と云る者なり
其後鎗術の名を得し人多しと雖も殊に其術の妙と極め孝義万人の上に出
し笹野權三郎義胤の履歴を尋るに頃の寛永年中時の武將に從一位左大臣

源家光公徳川三代の將軍と申奉つり武藏國江戸に於て天下の政と與りしろ一めし四海昌平万民鼓腹の樂をなす千戈の患を忘す一事茲に十有餘年公萬機の暇に基將基香茶の湯の會或は酒食の宴に金銀を費し給ひ者侈日を追て甚だしかりければ忠臣眉を擡て諫を奉つれど斯むのりの事をと聞入給えを當時三代の君に奉仕剛直母して智勇逞しき大久保彦左衛門忠教殿一日御前伺候され將基の御相手仕つらんと進み出局上駒の立様母擬へて治世母亂を忘れを武備に御心を盡され御遊樂と止り給へかいと理を盡して諫奉つりに此公元來聰明英智ふ在ませば忽ち先非を悔給ひ御行ひを正されたり此公寛永五年の事とか刀劍御師範役たる柳生但馬守殿を召れ當時我朝母て劍道の隨一の其方ならんが鎗術に何者あるぞと上意有ければさんい鎗を把て二と下らぬの南都寶藏院樂傳法印の高弟にて播州明石の城主小笠原右近將監忠真に仕へい高田又兵衛吉次と申者ふ

いんと言上あしければ早速又兵衛を江戸へ召下され御城中吹上の御庭に於て鎗術以上覽在ませり因て高田吉次の一世の曠と同道の士觀興寺七兵衛元勝を相手となし鎗の法式を上覽し入けきども折角の御召に目前精妙の術は顯さるるの本意あしとて鳥籠に養ひ置き一雀と御庭に放ち那を仕留よとの上意に畏まり奉つるとして三尺餘り立上る所を高田の直と鎗先を差向しは氣相の呼吸の術著るしく雀の忽ち羽を縮め地上へ墮と落たりけり然ば將軍家母の御感料ならむ日本一との御賞詞も高田のいと面目と施し主人迄の高名なりと拜領の品々を頂戴あし主家の屋敷に引取しに此事徳川家の御一族たる紀伊大納言殿の御聽母達し高田方へ使者を遣はされ吉次國元へ歸るの序大儀ながら和歌山へ立寄共よ此儀頼み存むるとの仰母又兵衛畏まり其後將軍家の御暇給はり江戸表よりの歸り掛和歌山へ無事し着き御長屋ふて三日の間休足して後大納言殿の御前

出に鎗術の事御尋に隨ひ先法式に御覽に入夫より水月戸入の傳を始め
 と一玄妙不可思議の與旨を惜まを微細に説盡を其辨香水の流るゝが如く
 なれば大納言殿の深く感じ且悦ばれ御前よ於て酒肴を給えり然ば吉次
 の上々の首尾ふて退出せしが此時案内せし近習の士に向ひ今日列座の面
 々達數多御座の中お半齡十五六歳おして雪折笠の紋付着たる少年あり彼
 人の姓名の何と申され以哉と問は近習の士の打合點漂の當家にて寶藏院
 兼鎗の指南役笹野權太夫の一子權三郎義胤と申者ありと聞て高田の備こ
 そと思ふ顔色ふて然いゝ返留中被人御閑暇の砌り某方へ御立寄願ひ度
 此旨失禮おがら權三郎殿へ御傳言下さるべしと云は近習の承知なく後權
 三郎へ告げる母笹野の甚く打喜び幸ひ今宵の非番あり率尋ねんと又兵衛
 の旅宿へ行て客間を通り端然として主人を待其体威有て猛るらむ美服と
 ての飾らねど顔色玉狀取女も稀ある容色ふて愛敬の露の灑るゝむり

りかるが内よの勇氣を合て眼ふ一毛の綴みなく斯る處へ右手の襖に聞く
 と等く高田又兵衛物状も言を十文字の稽古鎗と權三郎の頭上へ突掛たる
 其疾き事雷光の如くあるを權三郎の疾くも身を避て座におがらよ四五尺
 飛退き扇と把て受流を手續は感は又兵衛の鎗を捨て一禮し只今の失禮免
 し給へ今日殿の御前よ罷出小性衆數多の其中お貴所の身の構へ扇の把
 様眼の配りとも凡者とい思えれを且我兄弟子笹野權頭正胤主の面体は能
 く似させ給へば頻に懐しく存し御招き申一手試み申たる失敬の働も武
 門の帝と咎給ふな備も貴所の權頭殿の由縁の人かと尋ぬせは權三郎の兩
 眼より泪を破落々々と流し誠に正胤の我賢父ふま兄弟子と仰あれば委細
 御存じよもいえんが父正胤の寶藏院の高弟なりしに仔細有て師の勳氣を
 請是非なく諸國を修行おす中豊臣秀頼公の御招きに因て師範となり知行
 三千石を下し賜り先斗關東と御合戦の砌天王寺口ふて花々殿血戦して討

死せしと聞しのみ今父と稱する權太夫の元賢父の家来母で中瀬を以て姓
 となを者父の最期迄傍邊ふ在て正宗の刀二字國俊の短刀寶藏院鎗術の傳
 書八重垣流小太刀の傳書此四品の遺物を預り幼年の其一を抱へて立退
 く浪人の身に在しが武術拔群なるを以て御當家へ召抱へられ其を假小子
 と稱し是までの養育誠一産の父より劣らざる其も父の家を興さんと教る元
 父を學ぶも倦む聊り刀鎗の法を行ひたるのみ珍客へ對し最恥しく然に
 ても賢父の義兄弟と承まはれば父より違たる心地して他人とい思はれむと
 涙を押へて物語るに吉次も思はず袖を濡しつゝ、貴殿權頭殿の御子息と承
 まえれば一入嬉敷存むるなり未だ御若年の小腕ながら其術秀られし
 一見して能知たり此上とも尚怠らず修練有べ二十五歳の曉れより凡天
 下母敵あからん但慢心欲生むる時身を亡せしに至るも知す只慎む如
 かし我義兄の子息と思へば我甥にも等し差出たる異見惡しとを思ひ給ひ

どと昔一正胤引立ちられし事どもを語り出し恩報しの為なりとて合氣の
 術を傳授なし其夜の種々響應て權三郎を返し違日を經て高田の播州明石
 へ歸りけり是より權三郎一倍心を勵して刀鎗の術を練磨る事片時も
 怠らず毎夜人の眠るを待寝ふ屋敷より程速からぬ城山ふ祭たる尾形の神
 靈の杜あり其社頭參詣し武名を高くせん事を願ひ後の林ふ於て獨鎗小
 太刀の修行し心を入れ治承の昔牛若丸が鞍馬山僧正谷ふて兵法自得の丹
 精も斯やと思ひやられたり父權太夫も始めの程に心も付ざりしが後々
 怪み後を尾行其有様を見て感涙を流し驚嘆したりしが十五十六僅二年の
 修行ふて一家中に及ぶ者有まじと思ふ程母ありまけり此程權太夫の年老
 病勝りて出仕の日多からぬを權三郎の一日も怠らず殊に美少年と云才智
 勝れたれば主君の寵愛限りなく同僚は妬む者も少あからずと云ん

○笹野權三郎種田五郎左衛門議論の事

并權三郎紀野川堤ふて危難の事

○義胤紀州和歌山を立退く事

并備前岡山へ行事

時に寛永七年三月三日上己の佳節なりとて家臣等御祝酒を頂戴し各々興を添る餘り頃日流行の骨牌合を始めたり（此骨牌合と云は歌骨牌の如く小ざざれは和漢高名の武者を畫き和の金色漢の銀色の裏は貼しなり是を座上ふ數十枚並べ數人左右ふ別れて金と銀とを取分け其高を競べ武内宿彌太公望おど相應きを合するなり斯の如く其能く對するを取時其日の判者儒者軍學者と兩人有て彼人物の甲乙を評論し座中の衆議ふ及ぶ是只徒然を慰むる遊び事の様なれど其實は軍學を講究するの大益ありとて御前よて屢々催し有けるとなるん）皆も交るく骨牌を數番合せしが爰は種田流鎗術の指南番をお種田五郎左衛門長利と云るは其役に誇る強氣の

武士あり此日關羽を取て辨慶は合せ遂は長道具の論にあり常に我得たる素鎗の長さよ誇り是は勝る利益なきと云張つ、小太刀の用は立すおど罵りけるを權三郎の傍らに在て冷笑ひ居たりしかば種田の見答め若輩の其許おどが知所に非を論有は聞んと云慕りしふ權三郎の徐は答る様關羽が八十二斤の青龍刀おど利の成布ど有べきが夫を用ふる程の力おどては使ひ難しとて小太刀の早技おど利多きを唱へ實父正胤の鍛練せし八重垣流小太刀の意味を演ければ種田のグツと閉口せしが負惜み強き白痴なれば論より證據ありいざ御前よ於て長短の術を競べんと此段御前へ願ひ御免許を得ざるにより權三郎の九尺の鎧鎗種田の三間の素鎗を以て立會しは廣言ふも似を忽ち種田の權三郎の爲は突伏られ其座よも堪らず急病の旨を披露して退出を權三郎の面目を施しけき少しも誇らぬ殿より御酒を賜り夜に入て御出を退き中間一人は提灯を持て我家を指て歸りけり皆も今

日種田が試合と望しむ權三郎が出頭を妬み突伏て恥を與んと思ひし却て己が負とありたるの自業自得と云ものある種田の門弟等は是を聞て無念に思ひ血氣の若者五六人云合せ今宵權三郎が下城を待受致討し成んど紀野川堤の茂みへ隠れ今や〜と待處ふ權三郎の微醉より紀野川堤へ差掛るよ左手の闇を叢より曲者五六人物をも云を鎗を扼いて突掛れば權三郎此の理不盡ありと思へども是非を問間も亦く父が紀念の正宗を抜より疾く曲者の手元へ閃然と踊り込真先よ進みし二人の諸脛切放し續いて来るを斜身拂ひ或の梨割車切矢庭に四五人切伏たり残りし二人の是を見て叶えに者とや思ひけん跡闇まして逃失しかば頓て權三郎の悠々と刀を鞘に納め我家へ歸り翌朝養父權大夫より此由目附へ訴へけるよぞ役人立會て死骸を檢視するよ皆是種田が門弟にして用人番頭などの次男三男又の厄分の者などなき種田の彌々恥のかき上ありとて其夜逐電せしゆゑ權

三郎の切徳とあるのミ御前の首尾益々宜けきど切れし者の父兄より重役の人もあれば權三郎が後の爲ふ如何ある禍ひもあらんかと權大夫の勘當の届をさし其夜權三郎を呼此度の一件重役の子息もあるふより後日御身の爲ふも惡うりあん是は因て今日勘當の届をしたり然も身を懐み心を責て四五年の間諸國修行致まべしと教訓なまは權三郎の流るゝ涙袖もて拂ひ誠は是迄御養育の御恩勿々言葉は盡し難し斯も上仰ふ隨ひ是より出國仕つるべしとて義理ある妹お梅お後々父の看病を頼むありと住馴し和歌山後よあし和歌の浦より金毘羅船へ乗込夫より備前國岡山母到りぬ茲は佐原重兵衛正列と云鎗術は達せし武士有り是は笠野權頭の高第ありしが權頭討死の頃重病に罹て最期は逢む大坂落城の後諸所を遍歴し當時備前岡山の城下は住り佐原の屋敷を尋ね行て見れば七八間の道場状構へ内より大勢の門弟等が稽古の音喧すしく表札は佐原重兵衛

衛と書付たる状見て玄關より案内を乞姓名状通しければ取次の侍士立出
 先々此方へ御通り在べいと客間へ通し暫く相待處に重兵衛立出互に一禮
 相濟し後佐原の涙を淨め今貴所を見て亡師に謁見する心地せりとま待遇疎
 意おかりけまは是より權三郎の急がぬ旅故茲に食客となり代裕古あしけ
 るふ師にも勝る、との沙汰あり此重兵衛より乙丸と云る小兒ありて妻何
 其近來病死しければ或人の媒介ふてお雪と云ふ婦人と後妻母迎へし
 兵衛の五十餘歳お雪の二十六七歳にて然も艶色嬋妍婀娜たまは似合し
 らぬ夫婦ぞと譏る者も多うりし殊にお雪の多情にして何時の程にか權三
 郎がいまだ十八歳の美少年は想を焦し折あらばと伺ひ居たる中霜月上旬
 初雪降て最寒き夜重兵衛の泊番ふて日暮より家にお雪の斯る首尾を
 を多く有まじと些の酒肴を調へ權三郎を裁部屋へ招き今宵の初雪ゆゑ
 殊にお寒き強ればとて待遇つ微酔の眼元は十分の色を含みてまおだまると

り頻りは嬉りがまゝ丸体及び一か權三郎の采れつ、且怒り其不義を
 諫めて異見を加へし母はお雪の大い取たる面色なりしが心の中と思ふ
 様儲々見うけよらぬ賢藏もある者哉と百日の戀も一時に醒果腹の立ど
 も顔に出さむ只是御身の心を引見たる戯まなれば後必を口外御無用なり
 と云和め最本意なく立列れける諸もお雪の熟々考ふる母此事他人は知
 れなば恥の上の恥なり先をる時の人と制し後る、時の人を制せらると是
 より夫重兵衛母讒言を構へて彼人若氣とい云ながら君の目を忍び折節の
 妾を口説事おどありと云おせば彼市は虎と出まの譬の如く重兵衛も半の
 信し待遇始の如くお非れは權三郎は是等の氣色を敏くも悟り一先此處を
 立去るよの如くと思案と極め私儀豫て武術修行の爲國々を遍歴せん心得
 母て國元を立出し處先生の御厚情お預り長々御厄分母相成し段御禮言葉
 は盡し難く今般御殿を賜り石見美作邊を遊歴致度いと詳細に書記し置佐

原の家を立去たり茲ふ肥後國熊本の浪人より犬上三四郎と云者元山本無邊流の鎧術を稽古あしたるが此程佐原の内弟子となりける處元來奸智に長し者にて師の機嫌を取萬事一慣たる男あれば權三郎も劣らむ目と懸遣しける程にお雪の又々此三四郎も懸想せし母犬上の犬母も劣る義理知らむまきば人知れむ互は奸通し只其奸隙を患ひしが又も重兵衛泊番の日暮方より雪降出たり妨げある仲間五助に鼻薬を與へて酒を吞せし元來此五助の食事にて代ても好む故一弁餘りの酒を吞前後も知を寐入けるをお雪の見濟し最早是ふて妨げなしと夫より犬上を己が閨へぞ忍むせける

○犬上三四郎佐原重兵衛を毒殺の事

并權三郎佐原の死去を聞岡山へ歸る事

天の作る禍の避べし自ら作る孽の遁き難しと茲は佐原が妻のお雪の犬上

齊しき犬上を聞し忍むせ兩人とも身の恥まの小夜衣我夫ならぬ襦重怪しき夢をぞ結びける然るに仲間五助の不計眼と覺し咽喉乾くがまゝ、水を吞んと勝手へ到りしお雪の間にて男女の諸聲なすゆゑ今宵の寒さ先生の御歸りよやと何心なく與へ行お雪の閨を差覗くよ豈計らん犬上のお雪と枕を双べ居たりしうらなと驚き駈出すを犬上も驚きあがり刻起て五助と捕へ此事万一他言せば一大事なり生して置難しと刀の柄し手を懸るよ五助の活たる心地なく縁頬よ平伏今宵の事決して口外致をまじけれは何卒命状御助け下されよと兩手を合せて震へ居るを見てお雪の憫然小思ひ此の金子状與へて固く口止し其夜の無事に濟せしが或日本夫重兵衛何時より疾く御前と退きて我家へ歸り殊小寒さの強ければ寒氣發ぞいとて大い酒を飲んで卧ける處其夜俄に夢しく吐血して醫師の薬も驗なく忽ち黄泉の客とぞありたりける嗚呼歎むべし備前岡山一家中の師範役佐

原重兵衛程の英雄も今茲夫淫婦の毒手より、り敢果ある最期を遂たるの
 天と云ん命と云ん備もお雪の甚く悲しみたる体にて犬上と俱ふ後の
 事ども取賄ひ柳町の光禪寺母埋葬し七々日の法事も怠らむを營みけり夫よ
 り犬上の幼兒乙丸の後見となりて今誰憚る者もなく彌々お雪と襖を俱
 よし公然淫樂を恣まゝにぞおし居ける又門人中も平生師の大酒と憂へ
 殊は老年よして年若き妻と迎へ斯ては長命覺束おしと皆々危路しが果し
 て内損し給ひぬと一同嘆息をなしたり然ども其實は犬上の惡計ふより大
 酒は乘りて毒害せしと誰一人悟る者あらざりしは是非なき事共あり斯
 て寛永八年二月笠野權三郎は美作國津山ふ到り先旅籠屋善兵衛方へ一宿
 一手代を呼此城下にて劍術を指南致を人あらば教下されよと尋ねければ
 手代は心得此城内に宮本流の指南番をさる、鷲尾一心齋と申人あり餘程
 の名人母て門弟も四百人餘ありとの事と語るを聞て權三郎は打歡び厚く

禮を陳て翌朝鷲尾の屋敷へ尋ね行先案内を乞ければ内弟子体の者出来り
 何方より御出よいや御姓名承はりたしといふ其は紀州和歌山の藩士笠
 野權三郎義胤と申修行の爲遊歴致を者あるが先生の御高名を承りり故意
 推參仕つりては何卒先生は御目母懸とて此段御執次下さるべしと演じ
 るは彼若侍士與へ行一心齋は斯と告げるは鷲尾聞て首を傾け暫時思案の
 体なりしが碯と膝を打紀州の笠野氏とあらば權大夫の一家成人何よもせ
 よ客間へ通すべしとの差圖に隨ひ權三郎を客間へ通し頭て鷲尾は出て對
 面せしは顔の色は雪よりも白く眼中清かにして一毛の疵なく威有て猛り
 りを賢母無類の若者なれば一心齋初對面の禮華りし時紀州和歌山ふ其
 し知人あり中瀬權大夫と云當今氏を笠野と改められし由反承りりい
 貴所の權大夫殿の由縁の人にいと問を權三郎は頭を下さん以權大夫の
 私養父よいと是より賢父權頭が事又此度仔細有て武者修行ふ出後佐

原重兵衛方母食客となり始末ども落もなく物語りければ一心齋の大に
感ト夫より其術を試みよ四百人の門弟一人も及ぶ者なく權三郎の數
多の門弟も敬われ故茲に居るといふし半年餘り逗留せしければ佐
原の安否も心元おさま一通の書面を認め佐原の門弟青田左内(岡山藩
中にて勘定方を務む)といひ日米入魂ふるより同人の名宛ふして差立たり
此青田左内と云人の仁義篤實の君子母して聡も武道も精く權三郎の生質
を愛し其行方を尋ね今日も噂をなし居たりし折飛脚体の者青田様の此方
ふや作州津山より手紙届以御受取下さるべしと差出すを夫れ太儀な
りと受取て上書を見れば青田左内様笠野義胤と有母ぞ飛立むかり打歡び
急ぎ開封して讀下す其文曰く
一筆奉啓上以殘暑嚴敷以所彌々御安泰に被爲入恐悅至極奉存以隨而
私儀尊地滞留中の諸事御厚志お預り千萬難有奉存以豫て旅行前御禮旁

々御暇可申上處少々仔細有之其儀不及以段平に御仁免可被下置以將
又其後佐原先生の安否心元おくいふ付御様子相伺以尤も私儀遊歴修行
の身よいへば居所も不定おがら當時に作州津山家中鷲尾一心齋方は罷
在い先右時候伺ひ度如此に御座以餘の期拜願之時以恐惶謹言

寛永八年七月日

權三郎義胤

青田左内様

青田は是を繰返して見て借も笠野の作州津山母在留おする佐原の死去を知
せなば早速當所へ来るべしと直様返翰を認め作州津山なる鷲尾方へ届け
るに權三郎の名宛なれば笠野へ是を渡しけるを義胤の取手遅しと披き見
るふ其返書に曰く

貴書忝なく令拜讀以如來命殘暑未退以へ共愈御清健之由大慶不過之以
次に拙家無異に罷在に間御安堵可被下以叔佐原先生事當三月中旬頃大

酒後急病差發り吐血一二升及死去被致殘念至極亦御座以尤も先生存
生の中肥後熊本浪人母て山本流とかを修行以犬上三四郎と申者采當今
乙丸後見と号し罷在由此事付甚だ心元なき風説有之哉に相聞え以
得共其後公用寸暇なく右等の次第御通達も不及以速路の旅行御太
儀おがら其中當地へ御歸着母相成以え々拙宅へ御來駕願度奉待り以先
の急便此段不盡意餘の御面談之上万々可申陳以恐々不備

寛永八年七月日

青田左内

笹野權三郎様

笹野幾胤は是を見て天伏仰て長嘆一俾しい哉佐原先生の死去よ青田氏の
書状は甚だ怪むべき意味有は此の彼の淫婦の毒計の中り給ひも計り難
し何の免も有れ岡山へ立越むやと此旨を鷲尾に咄し暇を告て岡山へと急
ぎけり頃ハ八月上旬ふして稍秋風立初て涼しかりければ道中思ひの外抄

取頼て岡山へ着先深縮笠は面体を隠して青田左内の屋敷に到り一列以來
の挨拶を演ふどしければ青田も是より佐原の死去の様子且お雪犬上等の
振舞怪敷風聞有る由語る中日も夕陽になりま、權三郎は青田に暇状告
旅より今歸り一体は持成し佐原方へ到りし母お雪の權三郎は見て遠く
紅出是はくく笹野様能も御歸り下されしと當春貴公が御他行成さしより
程もあく某月某日先生の吐血してお死なされしと仰山お大聲立て泣けれ
ど涙は然程出もやらぬを權三郎は先其後の一禮と述私し事作州津山に罷
在先生の御死去の由承りれども賢否の程相分らむ一先御當地へ立越以
は々分明ならんご夜は日お繼で道中を急ぎ今日只今到着仕つきり然る
は彌々御死去在せられはどの借々歎は敷次第あり私し長々先生の御厚恩
を請末期の御看病も仕つらむ返々も殘念の至り切ては御佛前にて御詫申
上さしめて與ふ通り犬上よも面會し後々の取賄ひ嚙々御心遣ひの事を

んと挨拶し頓て佛前母燈明を照し水を手向香を焚替し佛名を唱へ居ける
中お雪の酒食と調へ權三郎ふ勸れ共義胤の頭を振り私し事少々氣分悪く
胸塞り湯水だふ咽へ下ら私をお構なく皆様御休下さるべし拙者の今晚
是にて通夜致し明朝御目も懸らんと只一人佛前に座を占て家の様子を窺
ひけるは犬上三四郎の内弟子ながら内外の事と心任せに取計ふ様子万事
不審の事多けきば權三郎の彌々怪しむ夜の更るをぞ待居ける

○權三郎佐原の讐を報ずる事

并權三郎乙丸の後見となる事

○義胤岡山を立退事

并山道は路迷ふ事

爾程は孝義勇敢万人に勝れたる笹野權三郎義胤の佛前ふ籠りし中夜の漸
次は更行て家内の者も寝静り聞ゆるものい虫の聲のきかり權三郎の心中

は佐原の法号を唱へ若惡人の奸計にて非命の死を遂給ひしあらば明か
某しへ告給へと一心不亂ふ念むるふ不思議なるりお香の煙の中より佐
原の亡靈忽然と願れたる体髪のかどろは振亂し全身血は深みて眼を瞋ら
し拳を握り然も残念の様子は見えし誠ふ身の毛も彌立むかりあり權三
郎の身を起し斯怪き姿を現さる、上の淫婦姦夫の毒計は相違なし我恩儀
の爲は讐を討生前の恨を晴させ申さんと夜の明るを待おがら一ツの計略
を案じ出し元來家内の勝手は知たれば仲間部屋に到り五助くと呼ける
は五助の眼を覺し誰方様やと戸を明けと闇にて顔の分らざれば透し見る
を我の笹野權三郎あるが長々其許の世話は成し故少し計りの土産も遣し
度阿持致したれど今爰にては出し無るにより夜の明るは人し知せず柳町
の料理屋柳屋まで出向呉よ某しは一足先へ参りて待受る故必きく来る
べしと云置夜明を待て柳町の柳屋へ赴きつ、權三郎の亭主は向ひ早朝よ

り些氣の毒なれど酒肴は三種むあり外に飯を二人前成丈急いで頼むあり
尤も跡より仲間一人某しを尋来らんふより直に通し下さきと頼み置る
座敷へ打通り五助の来るを待居たり暫く有て仲間五助の莞爾々々面みて
柳屋の門口ふ立此方へ笠野様御入りと問ければ先程より御待無先々御上
り成るべしと笠野が座敷へ案内し酒肴を持出るふ權三郎の五助も蓋蓋を
さし何も馳走のあけれども遠慮なく澤山と吞れよと肴を把て遣りなとし
頓て懐中より小粒ニツ三ツ出して紙に包み五助の前ふ置是れ甚だ異な物
あれど聊か土産の験までなり鼻紙ふても買るべしと云は五助の悦び斯の
存に寄ぬ御土産何より實に有難は賜辭退り却て恐れ頂戴仕つると押戴け
は權三郎の微笑時より貴様へ折入て尋問たき事ありと皆まで云ぬ五助の
合點其御尋の先生の死去の事なるべし其儀あらば御尋お共御話し申さ
んと思ひしありと是より佐原の存生中よりお雪三四郎が菫通せし事酒ふ

毒を入吞せし事光禪寺の和尚ふ五十兩の布施と遣り死骸を見せざる事ま
で物語れば權三郎の悦びも一々是を書留夫より食事仕果て勘定を濟し
五助を同道し柳町の光禪寺に到りて和尚と對面し五助が口書の趣きを以
て佐原の死骸を改めざる事の越度を問けれど元始免の中の事を左右舟寄
て云ざりしが追々權三郎の劇死尋問詮方かく五十兩を布施して死骸の
怪きを咎めを葬りし由を白状しければ其次筆を一書し認めさせ夫より縁
々ど身拵して佐原の家へ立歸ると等く内弟子犬上與方お雪の兩人を呼汝
等先生の恩義を忘れ不義菫通よ及ぶのとならば先生を毒殺したる大惡計
光禪寺住僧と五助の白状に因て分明なり今ぞ師の讐を報る觀念せよと大
音聲ふ罵りながら正宗の一刀を抜放せば犬上の甚く仰天し俯し惡事の露
見せしは是れ一大事なり兄弟をなきかと呼はるる應と答へて犬上が朋友
なる破落者十人むりり立出つ、皆一同に切て斬るを笠野の事どもせず爰

一追詰彼處再斬捨離く間母五六人試物の見事に斬倒せど未だ犬上への手
 も負せず残念なりと切齒をなまし汝何とて取避はべきと立對へど破落者等
 母懸隔られ殊に膝口母薄傷を受たれば既に危き其折柄不思議や乙丸真一
 文字に駐来り鎗を扼きて片端より突伏々々働く体大人も及むぎまば一同
 大ふ亂れ立を見て是や佐原先生の怨念子に乘移りて我を助る成んと權三
 郎の益々勇氣と勵して縦横無碍ふ切立難立遂に犬上を始め一人も残らず
 討取猶避行お雪を汝と云様守早く手裏劍發止と打付るゝ祖ひ違えず脇腹
 へぐさと立生死の知らず平卧たり因て一息吐お雪犬上の首を打落して重
 兵衛の位牌へ手向夫より光禪寺の住僧と五助引連此吉國主へ訴へけれ
 ば役人立會詳細母是と詮議せし母黑白分明なりける故權三郎儀師は爲ふ
 辭を報せし義勇を深く賞せられ佐原の家督に乙丸に賜り權三郎も後見
 を申付らむたり因て笹野の面目を施し乙丸は伴ひて響乃首怨を重兵衛に

基前二備へ大法會を修して靈魂を慰免夫より乙丸乃世話をぞしたりけ侍
 扱又光禪寺に和尚并五助とも罪に伏せしるべ和尚の寺法ふ處をべき旨
 して本寺へ引渡され五助の阿房拂ひとありお雪の本夫殺し乃大罪ありと
 て屍を磔けお梟られ犬上三四郎乃死骸の取捨お申付られけり其後權三郎
 の轡く佐原乙丸は後見となりて居たりしが其中に宜き門弟を撰て乙丸の
 養育を頼み且門弟中乃指南成も委ね其翌年寶永九年八月岡山を立出京都
 を差して上りけるが松州舞子に濱にて大雨ふ逢膝口乃舊疾再發して一歩も
 進む事成難ければ餘儀かく旅駕籠に乘て道々掃塵攝津乃名所古蹟を駕籠
 昇る物語不聞て桃井村なる三太夫の許に一宿せし處古疵増々痛て病氣
 となりしうら尾形に神靈を厚く祈念し供物乃洗米を粥に煮て是を食しけ
 るに靈驗著明く不日よして全快したり夫より此處を出て攝州に到り一人
 谷に古戰場須磨の内裏を見物し番が平家滅亡を歎け兵庫湊川に楠氏乃

誠忠を憚り布引れ龍杖一見して惡源太義平は神靈を拜し是より山越ふ摩
 耶比觀音は詰んと嶽岨を厭はず分登かと思はずも道は踏迷ひ行どもく
 本道再出難く唯山深く成乃となり秋の日の早くも暮て足元も定かならね
 ばさしも強勇は權三郎も殆ど五体乃勞れと覺え野宿するより外あしと木
 蔭を尋ね廻り折柄何やら岩の狭間より走り出此方を目掛て飛来らんとほ
 る其形人よ似て赤き髪は毛四方ふ振亂れ唇る長くして顔を隠し實母凄然
 き猛獸あり是は昔語りに聞及ぶ佛々と云ふ獸ならん若爲留まば武士の譽
 れ過失あらば一大事なりと笠野の日米は勇氣十倍し刀を抜て只一討と切
 掛きと佛々の自得は身輕よて其早き事電光の刺をかが如く右を討ば左よ
 交し左を斬る右へ飛足を拂へば宙天ふ飛上り隙を狙ひ搦まんとすれ共
 武術に於ては諸流は興儀を極たる權三郎争てう獸は爲ふ掴まきん畢竟此
 勝負は如何よぞや其の次の回も解分べし

○權三郎佛々を仕留る事

并佐布里左内は逢ふ事

○義胤播州上月は到る事

并仲間奉公をまゐる事

斯て權三郎は佛々を切立々々薄手二三箇所負をかと雖も勿々弱りたる景
 色もななく猛り懸かを拂んとして權三郎は岩角は跳き思はず谷底へ仰向
 落したは佛々の得たりと追付て同じ處へ轉び落ると倒れかからも權三
 郎は刀は切先を空様は立追来る佛々は下腹を一太刀がさと突貫き飲乃弱
 り所へ身を起し乗掛てさんぐふ斬付二字國俊は指添にて止と指けるよ
 骨は當り刃先聊か缺れたり此短刀を後佛々丸と號しが其後徳川家は重
 賢に成しとや一衛も權三郎は危き場所よて僥倖は猛獸を仕留一息ホツ
 と吐今の漸々身軀の勞れを覺えし折しも又々小暗き山蔭より一疋の猛獸



踊出たり最早今度の戦ひ勝べき勢力なり斯まで我運命の盡ぬるりと嘆
 ちがらも刀を抜て立對ふふ暫時と聲掛近付を能々見れば熊の皮ふて作り
 たる羽織を着し頭布をかあぐり捨たり借り人にて有けると思へど少し
 も油断せば彼方も手は持管鎗を引とむめて會釋ふ一甚し此山中鹿谷
 住次郎作と云者なり近來此山より梯々出て作物を荒まよより近付寄て突
 殺さんと斯の如く出立毎夜彼の獸れ行方を求めし今貴所の御働きを餘
 所ながら見物し驚き入ていと舉ければ權三郎の會釋ふも道迷ひ此時宜
 み及びし由物語る母彼の人の嘆息し夫の嚙々御勞れなさるべし甚だ見苦し
 き破屋おれど我茅屋へ来りきて休息し給へとて先に立宿所し伴ひ最懇切
 に待遇まぞ權三郎の其厚意を愧び瓦燈の灯よて主の体を能見れば年齒三
 十七八位にして人品骨柄賤しうらむ又十五歳むかりの乙女の傍らに縫針
 して居たりしが其容色の艶麗に爪外れの尋常なる事山家母稀なる嬋妍な

り又上手床の間と覺おぼしき處ところに鏡櫃かがりに飾り管くだま二本外ほかに種々の狩道具かぎものならぬ武器ぶきも見ゆるほど如何いか様さま是これの由よし有ある人の末すえからん未いまだ初し老らうも及およむを
 して山中やまなかに世よを避さげ事こと仔細さいしあるべしと與あ床とこしく思おもひ失しつ禮らいあがら某そのじの紀き
 州しゅう和わ歌か山さんの家か中ちゆう笠かさ野の權けん三さん郎らう義ぎ胤いんと申まう者もの様さま子こありて諸しよ國こく遊ゆう歴れき致いたし備び前ぜん岡おか山さん
 佐さ原はら重ちゆう兵べい衛ゑ方かたは暫しばく在あ留りゆう以もつ處ところ橋はし磨ま攝せつ津つ國くにの名な所しよを一いっ見けんせよと當たう八月はつげつ岡おか
 山やまを立た出いで布ふ引ひの瀧たきより摩ま耶や山さんに詣まうでんと熱ねん垣げんを厭いとはせ分わけ登のぼりし思おもはせ
 道みちに迷まよひ今こん日にちの時とき宜よろし及およびしあり然しかるに計はからむも尊そん公こうの助すけけを得えし誠まこと
 小わが我が大だい幸さいと申まうべし又また御ご主しゆ人じんより尋たづ常ねの山やま人ひとより在あるまじ最さい前ぜんの鎧よろいの構かま
 へと云い身みの働はたらき如何いかも武ぶ術じゆつは達たつしられ英雄えいゆうと見み進しんする願ねがはく尊そん名なを
 承うけたまはり度たしと云いければ主あ主人しゆじんの莞わん爾にと笑わらひ御ご客きやく人じんの姓せい名なを聞きて我わが名なを告つげぬ
 の甚はなだ不ふ敬けいあり何なにをか隠かくさん某そのじの播は州しゅう上かう月づきの城じやう主しゆ木もく下か備び後ご守しゆの家け米まいよ
 て佐さ布ふ里り左さ内ない重ちゆう可かと申まう管くだま鎧よろいの指し南なん役やくを勤つと主しゆ君きんも敬うやめられし掘くわ川がは軍ぐん太たい夫ふ

と申まう後ご者ものの謔げつ言げんに掛か永えいの暇いひを蒙かうり上かう月づきを追お拂はれ夫そのより浪なみ人ひととありて此この
 山さん中ちゆうに閑かん居ぐ致いたし口くち惜しき次じ第だいあり然さ乍あら是これ等らの儀ぎ押おして辨せん解かいあさん事こと難がたに
 有あねど然しかをれば主し主しゆの不ふ明めいを表あらはふ似にて不ふ臣しんの名な免めんき難がた一いつ因いんて只ただ天てんの時とき
 を待まちて月つき日にちを送おくるみ思おもへば最も早はや三さん年ねんも及およぶ秋あきの末すえ妻つまを失うしひ此この小こ女よめと
 申まう者ものと兩りゆう人にん貧ひんを甘あまん二に若わし仕つかを切きて此この小こ女よめを世よに世よに出いで度たくは涙なみだ汗あせ含かみ
 て語かたりせば幾いふ進しんて水みづ火かをも解とせざる權けん三さん郎らう左さ内ないが迷まよ懐わい然ぜん有あると深ふか
 くも察さつし如何いかもして此この人ひとを今いま一度いちど世よに出いでさむと心こころ中ちゆう再また替かて猶なほ終すま夜よ語かたり
 明あく翌あ朝あ權けん三さん郎らうの暇いひを告つげ再また會あひ約やくして佐さ布ふ里りが宅たくを立た出いで夫そのより摩ま耶や山さん
 小こ參さん詣けいし三さん木きの裏うら越こに掛かり上かう月づき城じやう下かに到いたり會あ津つ屋や重ちゆう助すけと云いふ旅たび籠かご屋や
 返かへ留りゆうし主あ人にん重ちゆう助すけを招まねた當たう御ご家け中ちゆうに佐さ布ふ里り流りゆうは達たつしたる御ご侍ざむらい士しの誰たれなるや
 と尋たづねけるに夫そのの三さん百ひゃく石いし高たかくて勘かん定ぢやう方かた頭あたま取とを勤つとめらる、濱はま田た六む郎らう左さ衛ゑ門もん
 殿どのからん此この人ひとの彼かの流りゆう義ぎの鎧よろいを能よく達たつひ給たまふ由よし風かぜ聞きありと教おししかば權けん三さん郎らうの

打喜び某し些仔細有より其家へ奉公住込たし何と御世話下さるま
さやと頼みしは重助の黙頭て幸ひ此程仲間一人を抱さしと仰らきたり私
の甥なりと御世話致さんと夫より重助の濱田の方へ行此由を咄ければ早
速速来るべしと有直子權三郎引連れ濱田方へ行て目見えも濟是より
權平と改め賤し勤め共忠實敷働き六郎左衛門の心に適ひければ若黨
愛助と云ふ古參の者は是を妬み其中宜うらむ或時四番の供をして大手々前
へ求懸りしに此方より木賊色の肩衣異びやか若黨仲間を引連れ
士ありて六郎左衛門と互に式禮なし彼の侍士今日長谷川の道場にて試合
あまは是より參るより貴殿も御出あれ然らば御同道申さんと直に兩
人連立て長谷川の道場へぞ到ける此侍士の別人あらむ則ち權三郎が顔を
見知度と付現ふ佞人梶川軍大夫なり偕又長谷川新六郎同く新八郎の兄弟
の俱子寶藏院流の槍術を申立梶川とい伯父甥の間柄あれば軍大夫の引立

よて指南番となり一家中にも敬いするがま、高慢増長の白痴あり斯て權
三郎の權平の供待の中稽古場の体を愛取と俱に物蔭より覗たけるよ各々
代るく槍術を競ふ状見て片頬ふ笑を含みながら皆可なりと遣るよと譽
けきは愛助の問答め下郎の分際として何と知て出過た事を云をるぞと遣
込る中梶川の濱田と俱に試合を見物して居たりしが濱田は對ひ貴殿は佐
布里流杖御鍛練なれば斯る折柄久振母て一手拜見致したしと云ける傍よ
り長谷川新六郎も進み寄及むをながり弟新八郎御相手仕つらまべしとの
勧めは濱田の辭まるも臆したるふ似たればとて權平を邸へ遣し稽古槍を
取寄るふ權平は疾くも歸り来りて主人ふ槍を渡も其体身の備と云法は適
ひしかば六郎左衛門も此に凡者に非むと與懐しく思ひながら請取て長谷
川と共に道場へ立出ると互にヤツと聲掛時雄を争ひしが元米名聞を好
まぬ濱田なれば腹の中思ふ様殿の御師範をも致すべき長谷川なれば負

まを大人げあしと能程に對戰故意と參つたりと聲を掛れば新八は槍杖引
ず濱田の眉見を充分に突ければ性質温順の六郎左衛門も少く面色を變
て元の座席に着けるが始終を見たる權平に怒り、堪無新八様暫くと聲懸
あがら踊り出るを濱田に見て驚死つ、下れと一聲叱れ共權平に些も聞入
を私一生國の紀州あるが本國ふ於ては槍一騎太刀一騎と申あり槍術の殊
に重しとし下々までも此道を心得ぬ者いなし、某下賤の子おれども槍術
の流儀争ひ親の勳氣を受斯の如くの体たらく參つたりと聲掛ても手を
止めぬと申御流儀の珍しく覺い何卒一本御相手ふあり申たしと怒りを願
し望ければ新六郎の面あげ母如何様新八郎が鹿忽母ては幾重も濱田氏
ふ御詫申べしと第と此度省慎れども權平に猶退りさきは無禮至極と濱田
の嚴敷叱りけるを梶川軍太夫進み出然云れど濱田氏幾も進む御家采殊
勝なり免して試合させらるべしとて目物見せま遣と言ぬばかり新八郎

よ目配するを權平心母可笑思ひ身持へして進み出る、先一番に道場の世
話役長谷川一郎立向へど權平に其構へ拙さを知て無手母と向ふふ一郎に
怒つて一突と突て掛るを何の苦もなく手元へ入て鎧を叩た落したり

○長谷川兄弟不覺の事

并新八郎愛助を討る事

○權平長谷川兄弟を討る事

并佐布里左内歸參の事

皆も仲間權平の第一番の立會、道場の世話役長谷川一郎、何の苦もなく
勝ければ二番は岩瀬兵馬と各乗出暫く槍を合せしが見事、負て引退く三
番は三田村銀平是れ叶はず突伏らる四番五番と高第次第は出て對へ共
皆悉く後きを取ければ是れ口惜しと長谷川新八郎獅子の奮を願ひし只
一突と立向ふを心得たりと宙に受留漸暫らく双方隙を窺ひ争ひしが當代

ふ幾人と指を折笠野權三郎が精妙の鎗術を争て敵をべた忍地云甲斐よくも負にけり權平の手練斯迄とい思ひも奇ぬ事をば梶川濱田の醉るが如く呆れ果てぞ居たりける此時當家中の大先生と聞えたる長谷川新六郎の顔色を變第よさへ引取せ高祿杖戴く我々主君に對し面目を濱田氏彼下郎を我に賜るべし鎗玉にあげ恥辱を雪がんと餘儀なく乞れて力なく承知しければ新六郎に立上り下郎參れと真劍の手槍を把て突掛るは權平少も駭がを是の無法あり不禮あり其儀ならばと木刀を手に把て父が傳書に自得の手練月形の小太刀の名法を以て繰出を槍先を支つ拂ひつ互に秘術を盡し中權平の手元へ踊り込と見えしが新六郎の利腕取て志た、かゝ投付早く元道場の外へ飛出し愛助旦那の御供を頼むと云捨郎を指て歸りしかば愛助の只肝を消し天狗う神かと恐れけり然らば新六郎の始めの廣言に似もやらを彌よ面目を失ひ一座白けて見えけるは小氣味能く思へども

濱田の吳々も權平の無禮を謝早々歸りつ、篤と思案を運らるに惜むべき壯士ながら此儘置いての速らるを一大事發らん不便あれども權平を討めせずんば叶ふまじと翌早朝呼出し汝入ざる腕立より出頭の梶川が親族なる長谷川兄弟よ辛き目を見せたるは忠義ふ似て却て我へ不忠ふあり事の駭きを引出すは目前故主が刑罰の刃を請よと突然繰出す鎗を權平と押へ仰せお背くふ有ねども某が申一通り御聞下され以上おて御存分よなり申べしとて賢父笠野權頭事大坂母於て討死し高弟權太夫の養育を請紀州家よ仕へ同役種田と議論一國を放れ備前岡山家中佐原方お轄く在留し其後摩耶山の山中にて辨々よ出會しも僥倖し仕留又佐布里左内ふ面會し彼人の歸參を取計はん爲當家へ下郎奉公爲由の始め終を物語りしかば濱田の聞度毎ふ長嘆し某兩眼有ながら斯る義勇の壯士は無禮をおせし返すくも無念あり況や我師の爲に信義を盡さる、貴所的心中感

する母猶餘りありと濱田も義状見て引ぬ大丈夫假令我身不禍を招く共師
 の爲母俱々力を盡さんと密談數刻に及びたり是等の由を若黨愛助の戸の
 節穴より覗き立聞せしが目の端母煤の付たるふて權平敏くも是を悟りて
 責問けるふ立聞したる由語りしおぞ必を他言をべからずと堅く口留し金
 一兩與へければ悦びて酒屋へ行しが頼み微醉機嫌ふ歸り来る搦手城門の
 西の方藪小路ふて長谷川新八郎ふ出會し一渠は聲掛是々其方の濱田氏の
 若黨にていふさきりと問れて私に濱田の愛助にていと答るを新八郎近寄
 其方母少々尋問たき事ありと酒屋へ誘引種々馳走し金子多く與へ昨日
 濱田が屋敷へ歸りての様子且仲間權平の事状問ければ口さかあきの下郎
 の常郎へ歸りて御主人に權平を手討し成んとせしより權平の紀州和歌
 山の家の中笠野權三郎義胤と云ふ者佐布里の歸參を執計らん爲仲間自身を
 消し奉公せし事の始終を告るは新八郎聞て然もことと合點き愛助が耳母

口を寄せ是を斯して何様々々せよと心中の謀計と云聞せ滅封したる状宮
 と渡し新八郎の酒屋の勘定を濟し早々あわられてこそ歸りければ叔を愛
 助の大醉の千鳥足よて歸り来り己が部屋に立入り今日の貴殿の恵みよて
 大いに酒母酔過たる故氣分悪く漸々の事よて歸りしとて呻り居る状權平
 種々分抱して寝させしに夜の亥刻過頃時分の宜しと愛助の状管をあた
 と落し是のあたり御同役の早川三太夫様へ急の御用向ありと最前旦那の
 仰せを承りし酒よ心を引れて忘れたり如何せんと常惑の体ゆゑ權平
 の氣の毒ふ思ひ我代りて届けべいと状管と受取何心なく駈出せしが小戻
 りして下女を呼云々の御用にて早川様迄行程は愛助の酔伏で正体をし少
 の間部屋番を頼むと云置再び足を早めて馳出し柳の馬場を行過れば雨
 側の萩の茂みの花盛り夜の錦も摺袖ふ濡れかゝりし花の露霽ても晴ぬ雨
 上り又降ぬ間歸らんと急ぐ心は提灯の消たる儘母提あがら泥濘足元踏

メて行左手より聲とも掛す突出たる氷りの鎧先尾形の神の守らせ給ふ
か狙ひの外れて合羽越股をのする身身引バ又も右手は閃く鎧を心得と
りと木刀よて拂ふとほれ敵の兩人劇敷中母も合羽をかあぐり懐中なせ
し合口を取ささんみも其隙なく燃え足場の上より赤土勝の泥濁り思ふよ
二人の長谷川兄弟被愛助を手なづけて我を此所送偽引しかと悔めど歸ら
ぬ此場の手詰最も危く見えたをけり茲に又濱田六郎左衛門の母親母考を
盡し妻ふ先立れ獨身ありしが今宵も母の眠りて後其身も臥床ふ入しかど
亥刻過頃不計目覚し咽の乾くま、下女のおさんを呼立るお仲間部屋
より返事して立出来り主人お怪み疑はまじと權平は頼れ部屋番を致せし
處權平は早川様へ出行し後母て愛助も又速しく外の方へ駈行しと告げま
す濱田の忽ち悟り備の義勇の壯者に怪我あらせての一大事とさしも濃厚
篤實の六郎左衛門斯る時の危き状態る、も勇者の常長押掛たる管鎧と

取より早く駈出し柳の馬場の後方ある堤へ上りて勝負を下見を中愛助を
見付濱田の鎧取直し不忠不義の惡僕め誅を請よと只一鎧は突貫き堤を飛
下り見てあれは權平の流石に其道は達せしか共二人が等しく必死となりて
働く母ぞ刃物のあらぬ悲しきの聊か手疵も受て段々後へ下るおが對戰
さま誠は危く見えたる處へ濱田の聲掛相手の長谷川兄弟と見受たり權平
急を輕舉る濱田六郎左衛門来りたりと呼りり割て入と兄の新六郎は
惡く濱田が助太刀と鎧を返して立向へば祿盗人の人非人思ひ知やと縁
出す濱田が一槍受損し胸板ぐさと突貫れアツと一聲叫びん敢を尻居に控
と倒れたり新八郎は今權平と火花を散りま挑み合いが兄の叫んで倒れし
はハツと驚く隙に權平は着入て鎧打落し避んとまると引捕へ腕捻上て驚
めけり濱田の權平の働さを譽權平は主の救ひを謝し互に一息吐て生捕を
引立々々直し屋敷に歸り長谷川兄弟が今夜の始末且笠野權三郎の義心佐

布里左内の宛罪堀川の隠悪悉く一通不書願し家老中へ訴出けし殿も一方あらむ驚き給ひ家中一統大評定になりて乱さきし處新八郎の拷問は堪無白状及及びければ堀川が隠悪明かふ露願及殿の始て先非を悔て佐布里左内を攝州より召返されしとあり

○權三郎上月を立退く事

并妹お梅も巡り會ふ事

○お梅國元の變事を語る事

并兄弟敵討首途の事

爾程に上月の家の中みて今度の騒動ふ付中老堀川軍太夫の舊惡露願して佐布里左内を召返さき權三郎の義勇拔群あるはたいに褒稱有て何卒召抱たしとありけれ共固く辭退しければ金銀衣服數多賜ひ又佐布里左内へ新地百石加増せられ堀川軍太夫の切腹家屋敷没收となり長谷川兄弟も家

屋敷取上られ兄新六郎の其場にて濱田の爲に討れし罪科の沙汰さく第新八郎の死刑不行はるべきを格別の御慈悲にて國中を構えたり儲え笠野權三郎の功成名遂て身退くふ如じと思ひ濱田佐布里も暇告又一家中にえ惜まるれと遂に上月を立出大坂指て赴きしが頃十月の中旬浪花京橋の邊に父の戦死せし跡と聞懐舊の涙止敢ざりしも夫より天満なる天満宮へ參詣し天満橋より大川の景色を眺るは冬の初めの鴛鴦鴨蘆間も眠る長閑さの實も小春の名の如しと思えむ折るら刀の鑄へがつたり當るや否や取て捻上るゆゑ是は何者もやと振向ふ此里ふて人の怖る、茨木組の狭客茨木正太の子分なり編笠以顔を隠し判事物漆の大模様ある廣袖は日和下駄何れも喧嘩仕掛の七八人理不盡の逆捻も爰が堪忍と權三郎の手を下て詫けれは彌も弱身を付込多勢を頼む破落戸中身一人頭立大男月形三次と名乗しも編笠腕は長谷川新八郎よりて汝重る遺恨を罵り

なから一同どう刀かたなを拔ぬ連斬つれづれ掛かると此方このたも心得こころえたりと拔手ぬも見みせむ八方はちあ相手あひて
 一い切散きりちらし遂つひに新八郎しんぱちろうと大袈裟おほげさふ切放きりはなをにど餘あの者ものに此手このて練あは怕おそれ皆散みなちり々
 一い遊失あそびうせけり折をりら淀屋よどや何其なにがしが出入でいりの使客をやく楯たての小六せうろくと云いる者もの天神てんじんへ參詣さんけいの
 戻もどり掛か此有このありさま様さまを見て權三郎ごんざんろうが人品じんぴんと云い多勢おほせを合手あひて一い戦たたかふ早業はやわざ一い感かんづつ、
 側そば小立寄たちよりの名なを名乗のりて知己ちかづ一い成なりんと云い一い權三郎ごんざんろうも賢父けんぷの舊跡せうせきある地ちあれば
 足あしを止とどめと思おもひ早速さつそく承うけ詔めいして萬事ばんじ以此このこ小六せうろくに頼たのみし一い月形つきがたの三次さんじを殺ころした
 る事ことも小六せうろくが内濟ないさいを取扱とりあつかひたる恩儀おんぎと云い此この使客をやくも以前いぜんに武家ぶけの出生しうつしやう母ははて
 武術ぶじゆつの心得こころえもあり頼母たのせ敷男しきおとこあれば權三郎ごんざんろうの兄弟せやうだいの義ぎを結むすび浪花なげは新地しんちに家
 を借かりて笠野かさの藤雪ふせつと表札へうさつ一い記しるし尺八しゃくぱちの笛ふえを能吹よくふければ是これを指南しきんし達磨だるまの喜き
 六むと云い子分こぶんに勝手かつてを賄まかはせ又また小六せうろくの子分こぶん等ら一い武術ぶじゆつを教おしへ轄し轄くさく無事むじゆ一い暮くらせ
 しが此年このとしも暮くらて明あれば寛永くわんえい六年ねん正月しやうげつ一いあり千歳ちとせ祝いはふ松飾まつかざり注連しゆれん掛か聯れんね一
 門口かどぐちへ年としまだ若わかき娘むすめの順禮歌じゆんらいか歌うた誦たひて立止たまるを通とほれ一いと聲こゑかくまど



聞ぬ振して表れし目を注ぎ野とあるは若や紀伊國よりおのされたる御武
士にて權三郎様とい申さむやと問けるを喜六は怪しみ斯と權三郎に告げ
ればはておと云つ、立出見る母十一歳の時別れたる妹お梅おれは這の妹
何として此處迄尋ね来りしぞと言きてお梅は驚き餘りの事、氣を失ひ
て倒るゝを是れたりと抱き上て介抱おせば漸々よして正氣付ど其嬉し
さと哀しきお物も得言を泣居るよぞ權三郎はお梅お對ひ何故斯の姿をお
一竿端も行ぬ其方只一人此處へお来りしぞ何か様子の有事あらんか何よ
くと問たるお梅お梅お落る涙とはらむ尊兄が他國爲れし後父上母の御病
氣然ど醫師が盡力と妾が介抱其甲斐ありて御本復のなききたれど夫より
猶々御老衰去斗の秋の某の日お御前勤の歸るさの宵聞給れ水神の木立お
忍ぶ曲者ありて父上様を欺し討米敢なれ御最期遂らましと聞より義胤驚
き呆れ暫し物をも言ざりしが天を仰て長嘆し嗚呼過てりくと其し御側

在あらば斯る變事も有まじき母口惟き事をしてたりと専ど悲歎し沈じが
斯ては果と氣を取直して而て其曲者何奴にて未だ行方不知ざるかと問
れてお梅お涙とはらひ上ふも妾が愁傷を一方成す憐み給ひ種々御整穿有
けるに其場お落たる小柄こそ種田が所持の品として彼者先頃逐電せしも
再び此地へ立歸り權三郎への意趣晴しに老父を聞討せしあらん卑怯未練
お振舞あり草を分ても整穿あり彼奴と刑し所をべきおれど然をせば孝子
の本意も空しく女ながらも笠野の娘諸國を尋ねて權三郎お巡會なば力と
合せ父の仇討なまべいと殿様よりの有難き御免許ありし御墨付し御饑別
迄賜はりければ母上様どもろともお順禮姿お身を消し上方さして登り
一途中貝塚峠といふ處で母上さまよの御病氣起り山の宿場し宿を取り長
く滞留おま中も醫藥お更なり御介抱のおよぶ限りも貝塚のその甲斐おさ
旅の空行て歸らぬ泉下の客とありたまひぬる悲しさを察せらまじしう情あ

る人の世話よて葬式も例のごとくに營みつゝ涙あがりし此處を立心ほそ
 さの道中も障ることなく浪花まで日を経り辿り着たりし思ひ掛なく兄
 様に巡り會ひし神佛の守らせ給ふか父上や又母上の導きか嬉しき事やと
 父母の位牌添て報響の免許狀をば差出をを權三郎のりけ戴き歎きの中
 の悦びあると君の御恩を拜を母つけ種田がふせる慈悲を深くも心まいさ
 どほり無念の涙も昏けるが汝種田五郎左衛門養父の響敵思ひ知れと拳を
 握りて突立し其有様は百千の大敵とりとえ恐れざる天晴丈夫と見えたり
 けり是よりお梅を此家置て喜六を相手し八重垣流の小太刀の秘術を授
 けまばお梅も父の響を討たれ一念ふて晝夜油斷なく稽古をしけるよぞ未
 だ十三四歳の少女なれども僅數月の其中お早太刀筋も法も叶ひ早くも上
 達したりしお梅三郎も歡び雅能く試はべしと思ひ居る中或日稽古し
 疲れしや横母ありて熟睡の体は機こそ宜れと拔足さし足忍び寄抜掛持し

刀の鐔音がツキとさする母お梅の岸破と跳起つゝ四方を吃度見廻したる
 眼の配り身の構へ法も叶へば兄幾胤の只管感し其上遠を打悦び假令敵と
 戦い共止め位の刺事出来なん率同道して響の行方尋ね求め出べしと
 て人に顔を見知られぬ爲又道中の助ももと丸山妙安寺母て虚無僧の免許
 を請鼠色の小袖に尺八袋へ一刀を仕込で天蓋一面を隠しお梅の元の願禮
 姿も兩人支度調ひたれば小六喜六も名残状告て浪花新地を立出つゝ同靴
 の一二町状隔る東海道を下り行敵の所在を探りながら急ぐ旅の日
 を重ね既し駿河の國府と過江尻沖津の浦傳ひして薩埵峠へ差掛り坂口の
 岩根母腰を掛同靴の辨當と開れし富士を脊中し田子の浦を眼下見下し
 實に海道一の風景と旅の疲れを慰めざる折しも麓の方より同出立の虚
 無僧一人登り来るを不圖見る敵種田五郎騷たまは若や夫うと目を注て
 お梅を木陰に忍むせおどする中彼方の虚無僧は尺八取て挨拶の笛の音島

く吹出せど權三郎の應もやらず暫時窺ふ氣色なきは彼の虚無僧の駭寄て
吾挨拶の笛を吹よ吹合さぬの抑も當派の故實と知らぬ偽虚無僧と覺えた
り我本山の命を受汝の如き紛れ者を詮議をべきの役僧あり天蓋脱げと云
様は尺八振上撃て掛れば權三郎も立上り返答する間も、どろしく同じく
尺八右手を取汝と云つ、打えらふに渠は早も直と措寄權三郎と搔掴み二
間餘りも投付る機會ふ双方天蓋脱げ權三郎に投られあがら宙にて閃りと
身は翻らし地上に突立尺八袋に手を掛て飛掛らんと思ひの外敵種田にあ
らざれば這の失禮御免あるべしと忽地顔色を和らげて一禮おまにぞ彼方
も面を和げ我の關口魯白と申奥州南部の家来あるが同藩花方幸左衛門事
主家に傳ゆる三種の寶を盗取て逐電し今舟行方の知されば主君の内意を
蒙り其奴が所在を探らん爲風俗を變諸國と修行なしつ、京大坂へ志し
東海道を登りし一尺今足下は丈格好彼の幸左衛門舟馬騾たれば思ひぬ

籍仕つりしとて互ひ禮を返し重ねて權三郎事の仔細に替共某とてえ
親の仇を尋る絶州浪人なるが足下の容も我尋る敵は騾騾たれば様子と篤
と見届けんとい圖お思ひ廻せし故笛を合せる事をも忘れ心ふもなき失禮
せし段幸ひ免し給へと云つ、妹お梅を呼出し我姓名をも名乗彼關口と諸
俱は其夜の倉澤の木賃宿何某方泊りけるが此日の幸ひ泊り客の最稀あ
れば夜舟入て權三郎の關口の身の上を問けるふ元取州の産關口八郎左衛
門有白の一子ありし仔細有て府中の城下は捨らましが成人て城主仕
へ其後武邊修行の砌に出羽國ある銀山にて強盜數名を討亡したる事など
委く語りたり此關口の槍劍の術の勿論柔術の達人と世の人も知り然も信
義の武士おれば權三郎も深く慕ひて茲舟兄弟の義を結び關口が路用は之
しを察せしかば金五十兩を取出して贈りけるふ關口固く辭するを權三
郎の種々に進むゆゑ魯白も止事を得て其厚意感激して受納むるを權三

郎も喜び忠孝を前母して義を後よをとあれは足下も我も功成の後巡り
 會日れ有ぬべいと再會を約し翌朝未明に關口の竝を立出上方指て登りけ
 り又權三郎の足弱を伴ひ殊に急がぬ旅なれば茲に一日滞留し旅の疲を休
 しし忠孝義心類稀なる權三郎も爰母一の厄難を醸せり抑此旅籠屋の主と
 云ハ元海道一の護摩の反り頭よて熊手の三次と呼しが今ハ六十九歳をな
 りて然様の心事の絶てせざる頃日風邪氣ふて此座敷に隣たる一間に臥
 る在ける處最前權三郎が貯へ金の多たを窺ひ見て久敷大金の面と見ざり
 しし今百兩餘りも奪ひ取ば無の快き事あらんと忽ち舊の惡念再發し
 て子分の誰彼も謀計を授け翌朝の食事ハ巴豆を入れ置けると權三郎ハ神
 なりぬ身の知る由なく是を喫せしかば俄然腹痛瀉する事夥多しお梅
 ハ大に驚きながら介抱せられ共中々治る様子も見えぬ詮方盡て見えよけり

○笹野權三郎倉澤にて危難の事

并三島母て町人を助る事

○義胤江戸表へ来る事

并紀州家の上屋形へ到る事

笹野權三郎義胤ハ熊手の三次が毒計に陥入り腹痛彌々堪難くお梅ハ一人
 狼狽て藥よ醫者よと介抱せよ三度も深切らしく執成し近邊の庸醫赤井
 玄石と云ふ者を招きしし是ハ水の代りし故と藥を與へけしは二日一夜瀉
 して三日目ハ漸く止りしと雖も權三郎ハ大いハ弱り面瘦眼凹み身体疲れ
 て歩行心お任せよ玄石ハ徐々按摩おとしし胸巻の金を探り冷る物状腹よ
 付置るハ甚だ毒ありと云母も權三郎ハ胸巻を解て蒲團の下に敷て臥居
 たりしお梅ハ晝夜の介抱等閑おらざるを神佛も納受爲給ひしにや第四
 日目ハ全く腹痛下瀉とも止て快よくなりけしは其夜の同胞も安心せし
 より疲れ出て前後も知を打卧たり然るハ彼玄石ハ様子を見濟し深更此

家へ忍び来り臥たるお梅を引摺ぎ外の方へ駈出さんとお梅はあ
 ちやと叫ぶ聲は權三郎は驚きあから目を覺し刀を取て追んとまゐる時肩間
 を覗つて投付たる火入の眼潰し灰の一團は飛散て兩眼ふ入り殊に額を打
 きて目眩き無念々々と這廻る其間浦團の下の金子の疾奪取き一時起
 る禍ひの元の主三次の仕業と夢も知を斯る處へ渠等が駈着て深切らし
 き分抱母心を免し無念とあせまど其甲斐なく怒りても勾引さまじ妹お梅
 の今更是面おし我足手叶わば敵ふ逢とも撃難しと自ら心を勵まして尚
 兩三日滯留し眼の中は思ふ様假令お梅を尋ね得る共金の残らむ奪れて進
 退は谷りたり渠勾引されしとて妹乃命お係る事の有まより一日も早く江
 戸表へ出知人を尋ねし上又詮術も有かんと腹に悶腹は答て主お少の路用
 と借り元米健勝ある生きあれば眼の痛は治らざれ共氣力全く快よけまば
 三次に厚く好意を謝し倉澤を立出宿々普く尋ね歩行て三島の驛迄到る

日の眼病も全快しさりしかば先明神の社に詣て武運長久を祈り妹お梅の
 恙なきと念に茶店お腰打掛休居たる折柄往來の人黒山の如く立止る状何
 事ならんと權三郎も立寄見るよ江戸町人の上方歸りが道中馬より今下際
 は九州侍士の乃の柄は泥草鞋を當たるとて件の武士手討ふも任無まじき
 勢ひは彼の町人の平謝りに詫けれども勿々聞入を終り刀を抜て斬んとを
 るを權三郎に見るよ忍びを見物の群衆を押し分町人の爲に理非を説て謝を
 なまふ渠底意地悪く云募る間よ素早き町人のつと逃出し人込の中へ紛れ
 て行方知れを成けるにぞ合手を逃せし上其方が相手ありと有無状云せ
 る權三郎お切て掛るを身を蹴し付入て利腕押へ刀を奪取り發打と睨み汝
 如きの馬鹿者に言葉を費をも無益なれど耳あらば能聞べし汝も兩刀帯せ
 しかば少の武士の法も辨へ知るべし高の知たる町人を手討し致したれ
 ばとて汝の譽れも成ふも非を渠よに定めて妻子も有ん刀の武士の魂其

柄先を穢さきし町人の慮外あらむ汝が油断せし故なり其し双方の爲を
思ひ理非を述しふ却て我ふ仇せんとい言語絶たる人非人以後の必を慎
むべしと小兒乃如く母教訓され權三郎の投出たる刀を拾ひて鞘を納め後
をも見せぬ逃失ける誠な氣味よき有様あり斯て權三郎の徐々と此場を
立去ければ見物人々權三郎の後姿を指差何れも虚無僧ふや人間母てよ
も有まじ大男れ刀を奪取て種々教訓し町人を助けし有様凡人ならじと
動搖めさけり權三郎の其日箱根一宿し翌日小田原を通り過る昨日の
町人追駈来り誠に危き處を御助け下さきし再生の恩人なりと幾度も禮を
述備私に江戸日本橋着屋新八と申小商人の江戶表へ御出府と仰らば
虚無僧寺へ御逗留あらんより私し方へ御入下さるべし二階の何時も空で
居れば心置なく御宿とあさき諸所御見物あさきよと最真實言けきば權
三郎は大笑び然らば貴所のお言葉甘へ御厄分あがら四五日御世話相

成べしと夫より同道あまは新八の喜びて四五日の借置五年十年又御生涯
ありと御宿仕つるべしとど、物語りあがら翌々日江戸表へ着けきば新八
の女房の待詔たる餘りふや敷居を跨ぐや否大群にて何處も今迄何して居
られしと云は新八の伊勢へ参り夫より京大坂金毘羅宮島と先から先へ唐
土天竺まで行處手前の顔が見度なり又夫よりも此客人の命の親御馳走申
せと三島の始末を悉皆語る母女房の權三郎の顔と始めて見るに年若く色
白く人品骨格清かあるふ心と動し亭主と打捨權三郎をちやほやと待遇し
けきば新八の些少悋氣々味なるも又可笑し爰に權三郎義胤の翌日案内を
頼み先曲輪の内の大名屋敷の處々たるを見又市中に繁華等流石に天下の
武將の御膝元の格別ありと驚れ感へ淺草寺の觀世音へ参請し上野東廩山
神田明神と諸所と見物する事四五日はより本所深川亀戸と名所舊跡隈を
く歩行或日靈巖島の邊へ来る母下よくとの聲嚴しく行列正しく来るに

何れの大諸侯と見るよ三葵紀の字の合印の紛ふべくもなき御三家の其一ある紀伊大納言頼宣卿として今日富ヶ岡八幡宮へ御社參の御歸路あり權三郎驚き傍らに跪づき居る中御轎物近く成まゝと思ひを大地に平伏て頭を砂に着けまば大納言殿御轎物の中より御覽じて不審非思召御駕籠脇の菊地金彌を召て彼の虚無僧肆の者大地に平伏下座おゝたるに何者なるか問来れと仰に金彌馳来り一目見て大に驚き 三郎殿かお久しや菊地氏かと互み一列以来の挨拶殿の待遠く思召又も近習杖遣し給ふに金彌の驚きて馳歸り渠に笠野權三郎なりと申上ければ然ば用こそあれ汝後ふ残りて速来れよとの仰ゆゑ金彌の畏み權三郎を引連れて赤坂の上屋形へ歸り来りし權三郎は只一人御前召召れ恐るゝ御次の間より扣居るを大納言殿の近ふくと呼給ひ汝先年國と立去しかば養父の死去を知を在べし幕府の地を踏みながら我館にも參らむ不忠不孝の人非人我自ら成敗せん

覺悟と致せと槍追取て突掛給ふに權三郎は恐れ入るがら兩手を上て暫く御手を御止め下さるべし私一末期の思出言上仕つり度一儀ありと本國と出しより諸所を巡り大坂在留の砌り妹梅お巡會始めて養父の横死と知たる事より妹お梅お武術を習はせ同朋仇討し出たる趣き薩埵の危難に困窮し三島の驛にて當地の肴屋新八と申者を助し事迄始終を逐一申上れば元来御心お叶ひし權三郎の御怒り疾くも解て彼に孝ふして忠あり義あり可惜壯士斯まで一薄命ある哉と憐れ思され落涙し給ふ事忝けお然ば權三郎は首尾能誓を討べしとて金創救命の丹藥を納たる印籠に金子と添て賜りければ權三郎は身は餘る御恩恵と是を戴き深更お御前と下りて肴屋へぞ歸りける叔盟朝二階にて拜領の小判を並べ再拜して居たりしを女房に見て窃お新八に耳語やう二階の客人の盜賊に違ひなき昨日の朝内伏出て夜半過し歸り今二階にて小判を並べ居たと見付たり万一此

事露顯せば大變ゆゑ早々宿を断られよふと、夫婦相談をして居たる折し
 も若黨仲間状召連たる立派の武士入来り肴屋新八と申此方あるや笠野
 氏の在宿かと尋るを唄や捕手の来りしと女房の裏口へ駈出し新八の青く
 なり震々と震ひながら權三郎ふ斯と告ければ、義胤合點て對面せしむ彼の
 武士一禮して其しの紀州家より近來召出さきたる三傳離相流の鎗術指南仕
 つる石野傳一郎員氏と申者なり今朝殿より急の御用有て只今故意く是
 へ罷越たり後刻身共が道場まで御出下さるべしと仲間持せたる風呂敷
 包衣類一重袴羽織を添て權三郎の前より差置甚だ鹿服ふいへども御着用下
 されよと言以聞權三郎の押頂き君恩の忝けなきを謝けまは石野の所書を
 差置私宅へこそ歸りけし借も新八に此体と見て紀州家の蓋中なる事を
 始めて知り漸く安心し女房を呼彌々權三郎を敬ひけり

○權三郎敵の在家を聞く事

并敵種田を取返す事

○義胤再び大坂へ趣く事

并掃磨難にて海賊退治の事

借も笠野權三郎義胤の早々仕度を調へ何の用うの知ねど牛込神樂坂ある
 石野傳一郎の道場へ趣き案内を乞ければ取次の侍ひ立出此方へ御通り有
 べしと客間へ請へ暫く相待處ふ傳一郎出采り殿の御内意母貴公が父祖傳
 来の小太刀機合の與儀の餘人よ曾て知る者あり權三郎の身の上万一の
 事あらば其術世ふ斷絶せん因て汝懇望して習ひ置べしとの仰あり足下若
 許容あらば我三傳離相流の與儀をも傳へ申べしとの事ふ權三郎の頼宣卿
 の武道は御執心淺くらぬを愧こび感へ夫より兩人互ふ秘與と交易し立
 會試むる并權三郎が早業の精妙勿々餘人れ及ぶべきよあらざまは傳一郎
 彌々感心し我三傳の寶藏院種田大島の三流を合し三傳の一流と申なり借

又足下またそくか一我わが一大事だいじの秘傳ひでんを教へ申まうさんと傍かたへの人ひとは退しりぞけ權三郎ごんざぶろうが耳みみふ口くちを寄よ彼種田五郎かきねたごろう左衛門ざゑもんと申まう者ものの我師わがしと頼たのみし種田藏人ねたぞうじんの一族いちぞくにて反ひりかし聞きば渠かれの當今上州高崎たうこんじやうしやうたかざき安藤對馬守殿あんどうつしまのりかみとのの家中かちやうに居いらるゝ由よしふり疾々さやくさやく尋ね見みらるべしと語りけきば權三郎ごんざぶろうの懸立かたたちむりりむりりに悦よろこび何なにより有難ありがたき教をを承うけりり感謝かんしやうし堪たへどと厚あつく禮れいを迷めい暎えいを告つげて青屋あややへ立歸たてかへり翌日あすじつ早々さうさう新八方しんぱうを立出たてい上州しやうしやう指さして馳行ちせうけるふ二日路ふつかぢして高崎たかざきに着家つまか者もの安藤典膳あんどうてんぜん對面たいめんし御免狀ごめんじやうを見みせ種田ねたの舊惡きうあくを委敷くまひ演舌えんぜつし及びおとけるし當時たうじ主君しゆくん對馬守つしまのりかみの江戸えど在府ざいふおまど捨置すておまが難がたしとして種田ねたと招まねき寄よりりり今いま改名かへなして種田ねた逸平次いつぺいじと申まうせしが何心なにこころなく入来いりきたるを隠かくし置おきたる捕手とらての役人やくじん踊出おどりだて手込てこままかか刀やいばを預あづかり舊惡きうあくの次第しだいと責問せめとがし逸平次いつぺいじの笠野かさの權太夫ごんたふを閻殺やまころふし紀州きしゆを立退たてひし事ことを殘のこらら白狀はくじやう及びおとびりり因よりり運分川邊うんわけがはの牢屋らうや母殿はは敷敷しきしき置おき此こゝ由よし江戸えど邸ぢへ言上ごんじやうす權三郎ごんざぶろうの高崎たかざきふ逗留とらうりやうして其沙汰そのさたを相待あひまちけるし未だ種田ねたが運命うんめいの盡つざりけん

爰こゝに逸平次いつぺいじを義兄ぎけいと稱しやうする大坂方おおさかかたの殘黨ざんたう赤間東左衛門あかまとうざゑもん腰野こしの又八またやちと云者いふもの兩人ふたり頗おほる武藝ぶげいも勝かれければ種田ねたが日來ひごろの恩儀おんぎを思おもひ追分川おひわけがはの水底みづそこを潜ひそり牢らう獄ごくを破やぶり逸平次いつぺいじと救きうひ出いだを權三郎ごんざぶろうに此近邊このきんぺんに宿やどりて居いたるゆゑ一人ひとりの牢番らうばん來きり讐しやうの逃にげたる由よしを告つげるよぞ權三郎ごんざぶろうに急いそぎい駐付ちつき敵かたを竹藪たけくさふ追おひひ込こめるが斜かたがに切きり竹たけの株かぶふ足あしを踏ふみ苦痛くるしみ不堪たへを猶なほ豫よして居いける中うちに行方ゆきかた知しれぬをふりふけり權三郎ごんざぶろうの口惜くちあしく思おもへ共其甲斐ともそのかひなく惘然もうぜん歸かへり來きるふ安藤あんどう典膳てんぜんは是こゝを聞申きこまう譯わけの爲ため自殺じこくせんとするを權三郎ごんざぶろうに我怪わがけ我がより猶なほ豫よし且かつに敵かたの運命うんめい未だ盡つき捕逃とらにがしたるし尊公そんこうの過あやまち母ははのいはをどて是こゝを宥なめ足の疵きず全快ぜんかいせし後高崎表のちたかざきを立讐たてしやうを逃にげし趣おもきを書面しよめんにて石野方いしのかたへ知しらせ又また肴さか屋新八方やしんぱうへ長々ながく世話せわにありし禮狀れいじやうを送おくり其身そのみに木曾路きそぢを經へて道々みち妹いもお梅うめの行方ゆきかたを索もとめ又々また大坂おおさかにい出い出い小六等せうろくとうを尋たづねて元居もとゐし處ところに住居すまひなら空むかく月日つきひを送おくる程ほどふ光陰くわういん白駒はくこの隙ひまを過へるが如ごとく疾はやくも寛永くわんえい十一年じゅういちねんと成なりぬ備そなへ又先年またせんねん

東海道倉澤ふて別れたる關口魯白の中國西國九州まで彼賊を尋ね巡り此
程大坂へ出ると不圖權三郎一行合一列以來の物語して權三郎の住所へ俱母
来り夫より倉澤ふて別れし後妹お梅を勾引きし所持の金まで奪取ら上
州高崎まで敵種田を取逃せし事の始終を語りければ魯白の嘆息し承えれ
ば甚し少し心當りあり此程兵庫の津へ一宿し隣座敷お宿りし旅侍士の物
語と聞ふ鏡後柳河の城主立花家ふ於て鎗術の達人兄弟三人新規召抱られ
君寵甚だしとの趣免若や種田赤間等よての有ざるの一度行て試み給へ
と云ふ權三郎の勇み立其夜の關口を泊翌朝魯白ふ別れを告て旅立ちし備
後國尾野道ふて早風三右衛門とて中國舟双なき大商人壘表千綱等を大
坂へ積込来り早風北と名付し千五百石積の手船に歸りし便船し安治川口
より出帆せしし船主の早風の番頭善兵衛其餘船頭一人働きの若者等より
諸國の旅人便船せし人数凡三十人餘り乗組よて順風ふ真帆状十分揚波

總の母 番頭の千兩箱を三ツ四ツ積たる所は大きやかなる磁石を据
て座し便船へ々の口々母己が國々の自慢話しおどせしが頓て倦疲きて
眠らんとしと浪の音凄く船は馴ぬ者の眠る事を得ず日の暮夜の更行頃
船の播磨 過るは月の白晝の如く汗渡り海上の絶景類ひ無れば權三郎
の寝られぬ儘ふ船不出て月小向ひ夜の景色を眺めながら古歌など吟じ居
たる折しも曳さくの掛聲をきく追来るの察する所海賊あらんと見る中
舟程なく近寄數多の賊等船を潛付飛来し狼藉に權三郎の父の響を討ま
でに大切の命ありと物蔭に隠れて居たるに听人おれ共善兵衛の武士も及
ばぬ大丈夫刀を抜て振廻し數多の賊を寄付を便船したる旅人の戦々慄々
けるが此中ふ高山軍藤太と云る武者修行の者此体を見て飛出命限りに働
き賊三人迄切殺せど其身も數ヶ所の疵状請賊の爲母海中へ投落され最早
手は立者をければ賊は彌々傍若無人の荷物状奪んとするを見て權三郎思

ふ様賊三人迄討れしかど鉄砲一發も打ぬに飛道具のなしと覺えたり今に
 心安し大勢の人を助けむやと義を見て進む大丈夫物陰より踊出敷多の賊
 を相手として左右前後に切散し飛鳥の如く働きつ、瞬間に六七人物の
 見事一切伏たり此時賊の巨魁に元船に居たりしが手下の敗北に堪り得ぬ
 此方の船に飛乗るを權三郎に見て呵々と笑ひ汝が賊の頭なるう汝敷多の
 人を惱したる天誅受よと罵りて切込を彼方も心得たりと諧流し二打三打
 打合しが權三郎の故と拳打し小手をまた、か打ければ賊に堪らず持たる
 刀を打落さき瘡む處に付入て二間をかりも投附しが難なく生捕縛めたり
 又先刻よりの戦ひは小賊共の残らぬ殺され船中一紙半錢も失はぬ武者修
 行の外薄底負たる者もなけきば權三郎を神の如く敬ひ夫より室の津ふ
 着て船に血の付たるを洗ひ清め海賊を退治したる由は訴へ賊首を繩付の
 儘差出しければ役人引立吟味せしふ淡州無宿赤澤十内と云者よて年米海

賊をあせし旨白状し及び重き罪科ふ處せらまじしとあり備も早風の番頭善
 兵衛に權三郎が働きを謝し金百兩を贈りけれ共權三郎の路用も乏しうら
 を旅中財多きり却て禍ひの基なりと堅く辭して受ぎまき善兵衛の止事
 を得ず金と納め然れば此津にて權三郎を待遇の爲船祝はなさんと船頭始め
 若者共残りも長門屋三左衛門として此室の津にて一二を争ふ青樓へ伴む面
 々馴染の妓女えあれば此樓にて大酒宴を設け善美を盡し權三郎を饗
 應し内の暖簾の名を付たる長門と云る魁妓を權三郎の相方と定め番頭を
 始め各々車座になりて思ひく、の藝盡し或は拳酒順踊夜の更るまで興せ
 しに權三郎の素より静なるは好み酒も嗜まざれば殆んど退屈して席に堪
 ず早く長門の部屋へ入けるに此長門の艶色類ひなき上氣象高く又學問に
 も心を寄けまば一室の座敷俗を離き床の掛物を始め皆風致あり又茶室を
 設けて釜の沸る音に夜半の時雨状和し悉く皆權三郎の心よ叫び長門も同

人の美男として温順なる様子一憎らむ思ひて万事不實意を顯し馴々敷を
まど侮がましき振舞無薄茶の手前等も最優しく因て權三郎も傾城の賢者
ると始て知大の鬱憤を慰めけり折柄彼方の座敷にて鉦打鳴し手弱き女の
小音母て念佛を唱るゝ然も哀ふぞ聞ける

○室津母て笠野同胞再會の事

并同胞九州へ渡海高田又兵衛ふ對面の事

爾程一權三郎の念佛の聲心一關り渠の何人にて誰が爲し佛名を唱るる最
哀れ母聞ゆるありと問母長門の微笑那の御一座の善兵衛どの、御馴深明
石太夫の引舟八重梅と云稚い子にて去年より此家へ奉公一年の行ねど縹
緜よく才發者故お客多けまど男を嫌ひて打解けず強て迫る事もあれば
を捻上あどして見掛母寄らす力の強く男も舌を巻得どして夫は何時も夜
の更る頃那通り念佛を唱ふる事一時むるり故分の御客の邪魔も成んと叱

りても左右ふ止む因り者よまいと語るを聞權三郎若や我妹お梅が勾引さ
ま爰に居るよ非ざるうと思へば胸も打騒ぎ長門が用足し母立しを幸ひ辨
を知るべふ廊下傳ひ一行て一間を差覗けば渠の足音は驚き鎊し位牌と袖
ふ隠し灯火フツと吹消さんとまる女の紫母違はす妹お梅あり權三郎は遠
て一間へ入暫く待て兄權三郎なるぞと聲を懸るよ八重梅も驚れ振返り
此日来片時忘れぬ兄上りやれ御懐いやと取纏り暫時言葉も泣居たり權三
郎の嬉し涙を打拂ひ是お梅其後如何して此處へ来りしぞ定め難儀を
せしからん委しく語まじと問掛らまじて氣を取直し涙ながらに倉澤ある熊手
の三次が惡計よて此家へ賣れしより口惜くも此里に住み賤しき奉公を
事も若や敵の手掛りを聞出さんかど夫を頼み又毎夜御兩親の御回向も本
の心むかりよあし然共辛ひ苦を忍び身を汚さぬが妾の云譯堪忍して給え
れと流るゝ涙を止めも敢て一伍一什を物語れば權三郎も殆ど感れ我身の

上も粗々語り聞せ同胞手お手取交一四ツの袂を絞りけり折かち此方の
襖を明て入来る人あるより見返れば是別人ならむ船長善兵衛にして先
同胞の再會を祝し餘り蕭然母ありいへば座敷を替て今一献淡白と一駭さ
して皆々臥み申さんと彼方へ伴ひ酒肴を改めて權三郎は盃をさし御肴を
さし上んとて臺に乗せて出を見れば八重梅が年季證文あり權三郎是の
と驚くを善兵衛の平杖を正して權三郎は打對ひ失禮ながら御兩人様のお
咄の始終と立聞直母御身を購ひいひ聊り御禮の爲寸志を表する迄ありと
云にぞ權三郎は善兵衛が厚意を悦び感にお梅も引會せ厚く禮を云せけ
れば善兵衛は猶お梅は對ひ其御禮の何ど及ぶべし我々始め船頭ども御
兄君の在さむば海賊の爲討殺され魚の餌食と成ると御兄君の御働に
ふて半紙一枚失い一人だも怪我あさのみか海賊を塵しふかさきし後
々迄の愁ひもなく我々の大幸此上あしと權三郎が大勢を相手に働さし物

語りなどして今宵は皆々臥みけり借夫より兩三日過て船改めも濟ければ
順風をまつて纜を解き室の津を出帆して猶も船を駛らせつ、長門國下の
關へ着けむば權三郎は早風の番頭善兵衛不列れを告是より九州船も乗移
り終に豊前國小倉に到りけり爰に播州明石の城主小笠原右近將監殿母の
今より三年前去る寛永九年此小倉城へ移り住給ふ由權三郎聞知りけれ
ば必定彼の高田又兵衛も大方に此地に居るべし尋ね見んと旅宿ふて
其様子訊問合せる高田先生は近來宗伯と号さむ綾瀬川といふ所に隱居
なされ若先生家督ありて名を又兵衛と改めらむ由ありと語るを聞て同
胞の大に悦び早速綾瀬川へ尋ね行宗伯は對面しければ宗伯も思ひぬ再會
は限なく悦び厚く待遇せし舟權三郎は種田が爲ふ養父を討れ其後上州
高崎にて敵ふ巡會しか共渠が義弟なる赤間腰野と言ふ兩人の爲に取返し
此程窃に聞は彼等兩人は筑後柳河の立花家に奉公致す由因て是を討ん爲

来りしありと是迄有し事共具し語しうば宗伯の其考義を深く感し又同胞の薄命を嘆息したりけり爰に當家の指南番まで天下其英名を轟りたる宮本無三四の當時隱居して閑暇の身なれば常高田の家より来り若を圍む杖樂みとけるが今日も来りて宗伯の引合に權三郎と對面し敵討の志しを衰某しも先年敵佐々木岸柳を討し事ありなど語り出夫より武邊の物語ふ日をぞ暮しける權三郎若冠と雖も高田宮本より劣らぬ英雄おれば是ぞ三幅對の俊傑と稱つべし夜ふ入猶打解けて酒宴を催し各位義を結び彼の彼の桃園の古も斯やと思ひ出られて頼母殿こそ見えよけり儲權三郎が誓討の事を聞し兩人の我々同道して柳河へ赴うんと云けるは權三郎の押止め御兩所の御志し千万忝なくいへ共然よては某子が本意し非を誓の虚實を探る間何卒是なる妹お梅を御預り下さきたしと二三日逗留し其後權三郎只一人柳河さして赴きたり

權三郎義胤此處逗留中高田宗伯より右近將監殿へ義胤の事を申述べれば元来武邊に志操深き君の高田宮本より仰せて一家中武術大試合の一條あれど此の本文より要なきは略して爰に載せ儲も笹野權三郎義胤の只一人筑後國柳河に到り虚無僧の縁を以て當所寺町ある普化宗一心寺に宿を求め住僧より對面し四方八方の物語などおしけるは此住僧の元来實義深くと武邊の心掛も有て頼母より見ゆるより報讐の志操を語り主君の御免状をも見せなどし御當家へ近來召抱られし武道の達人三人有る由其名を御存にやと問けしは兄は種田一水軒と云四方鬚よて色黒く丈高く最も異体の先生なり又二人の弟は赤間某腰野某との云由なるが三人共當家の殿の御意より入出頭此上おしと語ると篤と權三郎は聞て儲は五郎左衛門めお相違有まじと思へど面を見ぬ前は粗忽の事お成難く種々思案と巡らせしが或日一水軒の道場へ行て祭内を乞某の作

州津山の者なるが武者修行仕つるふより先生に謁見願ひたしと云入ける
 此時赤間代稽古致し居しが今日の先生他出なりと執次の者母云せけ
 せば權三郎の力を落し大手の杉形にて其歸を待けれ共達ざる故又翌日も
 道場へ行し今日も留守と答へ其後又々問尋れば病氣と偽り己が面に見
 せざれど權三郎の来りて當時寺町一心寺に逗留せし由と敏く聞知て腰
 野又八に謀計を授け權三郎を欺討んと巧たり備或夜一心寺に盜賊忍び入
 りを權三郎の何の苦もかく生捕て何者あるぞと責問ども始めの勿々云ざ
 りしが終母責苦不堪無某の當家中の指南番種田一水軒の義弟腰野又八
 と申者我内々心を掛し女を一水軒に取る、事付送引あらぬ金子の入
 用ある故に當寺の内福と聞て忍び入たりと白状しければ權三郎の謀計と
 の夢ふも知しを宜者入来りぬと打悦び繩を解て勞りつ、一水軒の素性を
 聞し高崎の牢破りし種田五郎左衛門相違なければ渠の我父の仇あり

我母討せ共な何程の金銀をも與ふべしと願しけせば又八は
 一悦び是の有難き事を聞者か某一水軒を怨むれ共一旦兄弟の義を結
 ひたき渠と殺せし忍びず然る母足下父の仇とある種田が天命の盡る
 期あり必を導き申さんと眞實しやう云けるを然らばよくせよとて此夜
 の免して歸り遣りぬ然るふ一夜隔て、又来り幸ひあるかを明朝一水軒
 門第數多引違同下装束ふ頼面奉納の爲當所八幡宮へ參詣致すなり此時
 を過し給ふまると告ければ權三郎大に悦び當座の寝美を與へて腰野と返し
 住僧と斯と語りし夫の悦びしき事なれど報讐の誠一大事あり高田先
 生宮本氏などへも申遣し妹公とも呼寄候々事と計り給へ過失あらば悔
 返らずと諫れ共權三郎の頭を振俱し天を戴かざる讐を眼前に置あがら小
 事係り猶豫致し又も敵伏走らせあは何れの時母本望を達せんと返る
 を強て止め難く然程と思ひ給えし心母任せらるべしとて彼地の案内を

委細に教へ權三郎の差料の細身の先斗門田の海にて漁士の網を掛りて上とし無銘の太刀愚僧故有て所持をれど僧家不在て益なき物なり此刀は必ず名作と覺ゆ箱根の別當法印が管王丸に友切丸を餞列せし例も有は是を貴客に進らせん用ひ給はば本懐ありと取出して與へけるふぞ權三郎は辭をもるふ及びを大いに悦びて押載に能々見るに何さま刃文是々として一点の曇りなく實に尋常の刀からねば權三郎は彌々勇立腰に帯して曉より一心寺を出八幡宮の社頭に到り先武運長久を祈り此度本望を遂させ給へと念いつ、物蔭に身を潜め種田の来るを待程辰の中刻とも覺しき頃十七八人一樣に出立たる野装束の武士深編笠に面を隠し石櫃に登り来る是實に當立花家の若君清三郎殿にて此日種田も道まで御供せしが奉納の品を失念せし物有りて途中より我家へ引返せしなり權三郎は腰野の告しを眞實と思ひ種田が門第ごさんなま今や名米で討取んものと目釘を濕して

待かけたり

○權三郎種田が奸計に陥る事

并高田宮本義胤を救ふ事

○權三郎敵種田を討事

并笠野家再興の事

備も權三郎義胤は八幡宮の社内身を潜めつ、待處へ十七八人石櫃に登り来るを一兩人遣過し横合より踊出大音揚是紀州和歌山の藩中笠野權三郎義胤なり父權太夫の敵種田五郎左衛門尋常に勝負せよと呼はりながら刀を抜放し切て廻り忽地近習の侍士三人まで切伏ければ是は狼藉者連をなど大勢一同に拔連四方八方より切て掛り若殿に御過ちなき様にと前後に守護して遠避るを見て權三郎は此時備に種田の奸計に陥りたるかと始めて悟り申譯せんと思へ共篠を亂せる白刃にて最も劇敷戦ひゆ

其闘なきま、餘儀なく血刀打振く多勢を合手切結びたり然ども猛勇
 無類の壯士なれば聊かも手を負を却て近習の士數多切殺して隙を窺む脱
 れんとするを清三郎殿御覽じて綾瀬小五郎龜田新十郎の居むや渠を生捕
 と差圖あるに畏まりぬと二人の心得奉納有し長刀と鎖鎌を取下一兩人等
 く立向ふ小權三郎這の手強き者共と思ひ彌々秘術を盡して戦ふたり然も
 ども最前より多勢を合手母働死し故今の体疲れ腕弱り過つて石燈籠母刀
 を打當ければ鏝際よりぼつと折差添を抜んとせし間ふ綾瀬龜田衛と寄
 る矢處ふ打倒し人々折重りて繩をぞ懸たりける此時種田一水軒の時分を
 計りて歸り来り若殿の御安泰を祝しふと夫より權三郎を听奉行黒瀬玄
 蕃の手は渡し拷問せよと言付たは此黒瀬玄蕃と云の種田が無二の高弟な
 る故内意を含め置權三郎を責殺さんと巧しなり然ども權三郎の我身の
 承歴を委敷告報讐の免狀を證據として辨解し又紀州家へ問合給へと申立

けれ共更し聞入かく證文も偽物あり定めて當家に怨ある廻し者母相違
 あるまじ若殿母手向ひせし事不届なりとて手荒き拷問は掛不日に責殺さ
 んとを權三郎の天を仰て嘆息し我斯まで武運拙く敵の奸計は陥り死せ
 ん事旦夕ふあり然らば獄中に在て死せんより寧立花家と怨有て若殿を害せ
 んとせし由白狀ふ及び刑罪は行われんよ如く然るを遂に紀州家の御
 聴も達し立花家も祟り有は必定なり是を冥土の思出にせんと心を決し
 某し實は大坂方の餘類にて主家を亡され無念骨髄は徹まれば晉の豫讓の
 例に倣ひ刺客とありしが事果さるり一の残念なりと白狀あすまぞ然も有
 んとて口書に捺印を取爰母罪科極りければ城外の仕置場三本松原の庚申
 堂にて刑は行える、事は定りたり嗚呼今日如何ある惡日ぞや孝義万人
 ま勝れたる笠野權三郎も天の時至らむ父の尊眼前に在るがら討事能はむ
 却て渠が奸謀母陥り身の薄命を嘆息して死を極めたる勇士の心中哀れと

云も愚かり爰に綾瀬電田の兩人の心ある者なれば權三郎が冤罪と察し黒瀬玄蕃は對面し後日記州家より咎も有る御家の爲に惡うりおん能御思案もあるべしと云ど玄蕃は打笑ひ是は無益の御差出口あり万一越度と有るらば甚し切腹任ると更も取合氣色なく已ふ其日と成ければ權三郎を獄屋より出して城下の町々を引廻し三本松原舟連行黒瀬玄蕃は始め數多の役人嚴重に警固か一頭て權三郎は木の上へ登せ獄卒の素鎗と扼き念佛せよと罵つて鎗の穂先を眼の前へ閃かし義勇無備の壯士惡人の奸計に陥り大罪に處せらるゝとい知らぬ數多の見物も人品骨柄秀さるを見て落涙せぬ者なし權三郎は脇腹へ鎗を付らまんとせし時群集の中を押分て矢來の内へ飛入者あり諸人駭死是を見れば髪は切下身の丈長く菅蒲葉の裁付袴身輕の出立ふて大音は菓子に豊前小倉の藩中高田宗伯あり我義に因て孝子の冤罪と助ると呼りながら一刀と拔放して走り廻り獄卒下役人を手當

り次第に斬散は此時妹お梅も續に入宗伯の後に尾て是を助くよど黒瀬玄蕃は大きい怒り是は狼藉者生捕と下知をなほ機又後の矢來を飛越し跳入る一人の虚無僧天蓋を搜り捨我は羽州の浪人關口魯白なり笹野が冤罪を救ふと云つゝ權三郎の繩を解お梅を呼て介抱させ其身は宗伯を助けて組子等を四方八方へ斬散を不敵の膽勇は酷吏等群易し敢て一人も近よ者なし折から城下の方より駿馬に鞭打て矢を射付如く馳來り大音あげ笹野權三郎の死刑暫く待べし君命ありと呼はりながら入來ゆを誰人おらんとは伏見に當家馬術の指南番向井藏人なり隨へ來りし組子等も下知して黒瀬玄蕃を取圍せ君命に因て其方吟味の筋ありと繩は掛權三郎を駕籠に乘せ高田關口お梅を引連城中さして歸りけり是より前組子數多ふ云合め種田一水軒をも生捕せしる抑々權三郎が一命危き時に至り高田宗伯妹お梅關口魯白三人刑場と劫かし權三郎を救ひし如何成る仔細と尋るに

先母一心寺の住僧權三郎が捕われとなり入牢せし由を聞傳へ早駕籠ふて
 豊前小倉ふ赴き高田の隱宅を尋ね宗伯に對面して義胤事敵の謀計は陥り
 し始め終を告げれば這口捨置難き一大事と宮本ふ談合して殿へ言上し
 急ぎお梅を伴なひ三人の早駕籠にて晝夜を別を柳河へ来りし不豈圖らん
 や今日權三郎死刑ふ處せらるゝと聞官本の直に城中へ趣き家老立花三彌
 ふ對面し權三郎の紀州の藩中母紛れなく報讐免狀と所持せし事と演舌に
 及びたり因て家老三彌の驚き取者も取敢を殿へ言上を分り領主を以の外
 ふ驚き給ひ向井藏人母仰て先權三郎の死刑を止めさせ此と同時に組子ふ
 下知して種田と黒瀬を生捕せられり又宗伯お梅の刑場へ飛入り酷吏等
 を追散して權三郎を救ふ機彼の關口魯白の来り助けしに渠大坂まで權三
 郎は列れ和泉國まで到りしが義胤の後を追九州に渡り言合さねど機好く
 も此場母臨しとなり實は遅りしを早からず不思議は危き命を救ひは是天

孝子を取給ひしあらん然らば笠野を始め高田關口宮本并にお梅の各々城
 中ふ止め置れ猶紀州家へ聞合せとして向井藏人使者ふ立和歌山表へ立
 越て笠野種田の素性を尋ぬるは權三郎の宮本等が申處し聊る相違おけれ
 ば直様立歸りて殿へ言上おせしは殿の大いお怒らせ給ひ種田を拷問に掛
 られければ舊惡残らむ白狀に及びたり因て權三郎の答創療治し筋骨健全
 不成し上城外の空地に於て親の讐を討べしと仰出され綾瀬小五郎龜田新
 十郎兩人此役儀と承りり紀州家へ又々使者を遣されしは則ち讐報見
 届として松井新八郎罷越たり時に寛永十一年秋八月廿一日を以て報讐と
 定め綾瀬龜田の兩人の組子に下知して城外南の馬場は百間四方の竹矢
 米を結廻し正面に棧敷を掛南北に矢倉を組上矢米の中は秒と敷き勝負の
 場所とせらむたり時、當日よりけむり豫て此沙汰遠近に隠きおく聞え
 殊に此日の晴天朗かゆ未明より見物の貴賤稻麻竹葎の如く引も切を南

の馬場に群集して矢来の四方ふ充々たり備又矢来の中一段高を棧敷ふの
當城主の公達立花清三郎殿紫の幕を打せ陣羽織を着し軍扇を持て出座
ある近習の侍士四五十人左右に居流し又西の棧敷より紀州家の檢使松井
新八郎野袴ふ前黄羅紗の陣羽織にて着座せり東の棧敷に當家の家老用人
目付役其外の諸役人思くの装束母々々々として居並けし備又正面
の棧敷の前ふに當家の檢使役山口主膳銀の采配把て床几にかゝり内外乃
櫓の角より物頭四人足輕八十人皆棒を持て非常を戒め嚴重に警固せり此
時南に櫓にて太鼓を打鳴せむ頃や始るぞと我もくと押合へし合棧敷も
櫓も一同ふ勝負の場所を諒め居る斯る折から種田五郎左衛門南に口より
入来る其出立ふに白き單衣に白丸帯袴締柿色乃野袴を穿ち白き鉢巻して
二字國俊の二尺八寸餘り有けるを帯し悠然として歩行寄面魂今年積りて
四十一歳春高く骨太く眼大きく色倦まで黒し何さま一癖あるべし形粧お

り斯て種田の中央の砂の上敷あり一圓座お着相人の久しく獄中お苦め
らして身体勞れ何程の事有んと思ひ居たる折から笠野同胞に北の口より
入来るお先權三郎の出立に下し白の袷衣を着勝色の裁着をはき白練の鉢
巻し二尺五寸正宗の刀と横たへ妹お梅に白綾の單衣に同じ帯を締白練の
鉢巻して紫縮緬の玉襷をのけ白柄の長刀小脇お抱込權三郎が後續たり
遣後より高田宗伯宮本無三四關口魯白入来り此三人に床几にかゝりて扣
たり權三郎妹お梅も種田と同一砂の上に敷ありし圓座に座を（是より双
方へ白木の臺にて湯漬など賜り敵討の古式種々有と雖もくどくしけれ
ば略きて云す）備も双方立對ふ母權三郎辭を張揚此に珍しや種田五郎左
衛門汝如き學法未練の人非人よ今更言葉を賣きも無益な事と我怨みの一
言を聞せん近く進みて耳を澄すべし過よし年我議論負しを遺恨お思ひ
紀野川堤にて我を閻討しせんと巧みしも事成む屋敷と逐電なし其後老体

ある父權太夫を卑怯母も欺討にし名を變て跡を暗せしも今に至て五年天
 運漸く循環して汝と討事と得たり今に遁れぬ天の冥罰汝も出て汝も
 歸る怨みの刃受取れと言葉烈しく言放つや否や正宗の一刀を引抜詰寄ふ
 種田の問答の違ふ是も大刀を閃めか左を討ば右へ交へ右は左へ
 開き一往一來虚々實々秘術を盡して戦ふ体刃光りの電光石火暫時が程
 の挑み一が武術の達人殊に孝義勇敢千万人母勝れたる笠野も争か適ふべ
 き種田の太刀先四度路になり淺手四五箇所負しかど元より強氣の五郎左
 衛門迄を先途と戦ふたり權三郎の心乃内は斯る無道の痴漢を只一討ふし
 ての氣味宜かりを弄殺しまささんむと聲のみ烈しく懸あがら暫く對戦居
 たりしが充分相手の勞れしを見濟し頓て一聲叫ぶと共に討込太刀の種田
 の弓手を斬落し痿む處と着入て馬手の腕も討落しお梅掛きと呼ればお
 梅の長刀取直し父公の敵思ひ知と胸先深く割付られウンと仰向し反返り



後へ撞と倒れたり此時までも清三郎殿始め當家の諸役人勝負如何と手
汗を掴り固唾を吞で見物有しが今種田の倒るゝを見て棧敷を初め諸人一
度嘯と手を拍賞稱へる聲山川の谷して半時をうり止ざりけりお梅の
徐止止めを刺ば權三郎の近寄て首揺落し兩人棧敷に向つて蹠躡一禮おを
若殿初め紀州家の檢使并諸士の面々至るまで同胞の働きを深く感
じ一同城中へ引取りたり茲に至つて權三郎お梅の同胞の多年の本望を達
し喜悅事限りなく亡父の位牌を出して首を手向夫より高田宗伯宮本無三
四關口魯伯もろとも諸役人お警固をさせ徐々と歸り行ふ路次の見物口々
權三郎お梅の孝義を譽稱へ誠み前代未聞の報讐と感ぜぬ者こそなりり
けき其後笠野同胞并高田宮本關口等一同領主の御前へ召出され酒肴を
賜ひ加之高田宮本の御褒美として金子衣服等數多下され小倉へ送り歸さ
れけり借又紀州家の檢使松井新八郎へお家老立花三彌附添ひ和歌山へ立

越え首尾よく報讐相濟し段中上權三郎を當家へ給りたしと懇切お申入
らまければ大納言殿御聞濟有りて權三郎を立花家へゆづられしうば新地
五百石お母て一家中鎗の指南番となりお梅の本國紀州お歸り父の高弟を養
子として家をさて、是より笠野兩家とあり子孫繁昌なしたりけり借また
黒瀬玄蕃の惡ふくみし孝子お仇せし罪にて切腹申つけらる立花三彌向井
藏人の兩人にお増綾瀬龜田の御褒詞を蒙る次お一心寺住僧の此度權三郎
を助けし奇特は依りて寺領二十石寄附せらる先權三郎に送りし刀の無
銘の村正にて罪なき人を害し權三郎も不思議の災ひお罹りたり關口魯伯
の當立花家へ仕官致まべしと勧められしかども堅く辭し其後柳河を立賊
幸左衛門を捕へ主家の賢取返し興州へ歸りけり又種田の義弟腰野又八
の八幡宮の社前ふて權三郎の爲お疵を受獄中にて死を赤間東左衛門の逐
電して行方知れぬ又倉澤なる熊手三次醫師玄石等の舊惡悉々く露見し

領主の手へ捕れて刑せられたり爰ふ橋州上月の佐布里左内口權三郎が復讐の始末を聞傳へ殿へ數日の暇を願ひ濱田六郎左衛門同道ふて柳河へ来り權三郎は對面し先年の厚義を謝し目出度本望遂しを祝し其後嫁花女を笠野に送りけむば孝義稀なる美男子貞操類なる美婦人と真ふ一對の夫婦どと羨まざる者なかりける

名倉笹野實記畢

明治十九年二月廿五日出版御届
同 年五月 日 刻 成

定價金四拾錢

編輯人

不詳

翻刻出版人

麴町區飯田町二丁目五十四番地

版 元

水野幾太郎

同

榮泉堂

本石町三丁目

大

日 月 堂

横山町

同

辻岡文助

南鍋町

賣

兔屋誠

馬鞍町

賣

山口屋藤兵衛

本石町

橋町

上田屋 榮次郎
鶴聲社

各府縣下書林繪双紙店

榮泉堂 出版書目

天下茶屋

定價金七拾錢

後明美 警治談 白井孝勇傳

同三拾錢

野路の若鹿 波十郎兵衛物語

同五拾五錢

阿波 敵討 美談

同七拾五錢

同 紫深戀の浮織 和洋本

同八拾錢

漢 俠客語 所用文章

同四拾錢

通 漢語 必携客藝者種本

同四拾五錢

必携客藝者種本

同六拾錢

同 必携客藝者種本

同二拾五錢

